FateSeeker

制服学部メイドさん学科　TYPE-MOON 分科会
『睨月舎』 Presents

【CoverWorks】

皇　征介(Sprecial　thanks)

【Illustlations】

火星田レイ子　『三人共に』
PIN･X　『さーばんとらいふ』

【CONTENTS】

さーばんとらいふ ..... 阿羅本　景　　3 p
三人共に ..... 阿羅本　景　　31 P
編集後記 ..... 阿羅本　景　　51 p

さーばんとういふ

阿羅本 景
イラスト PIN・X

春の太陽が、遮るもののない屋上を暖めていた。
桜もあっさり葉桜になってしまって、学校で気になる話題は五月の連休に何をやるか、ということになっている。今年の連休はいろいろ繋げれば十日はあって一体何をしようか、と今からはしゃぎたくなるのも分かる。

なんとなく屋上の定番座席となった一角に座り、ぽかぽかと日差しを浴びる。
こうも温かいと眠くなる……朝六時に起きて朝の鍛錬をし、食いしん坊の多い朝食の用意をして、おまけにお弁当までつくって、なおかつ校門でばったりあった美綴に射場に強制連行されてあいつどころあいつの弟の弓まで見させられ、それに午前四限の授業が積み重なる。

そうもやることがあると、昼に屋上で膝を抱きかかえて眠りたくもなる。
ふぁ、と、欠伸が漏れる。まったく春の海、ひねもすのたりのたりかな、という俳句が浮かんでくるように……って、ここからそんな長閑な海なんか見えないけど。

ああ、海か、海。いいねぇ。最後に行ったのは何年前か、でもあのとき一番はしゃいでいるのが親父だった気がするし、ちゃらちゃらしたのにつきまとわれナンパされて困ってる娘たちに跳び蹴りで助けに入る親父を子供心にかっこいいと思ったもんだ。
……今にして考えると晩年まで、どうにもこうにも子供っぽかったなあのひょうろくだま。

「ふぁ……」
「あら、眠そうね士郎。いつも無理しすぎだから寝てても良いわよ」

ふっと目の前に日差しを遮る影が現れる。
顔を上げると――遠坂が居た。ツーテールに制服姿で、もはや三年一、いやもはや全校一の美少女、穂群原の女王の名を恣にする美貌と、誰もに優しい理想の先輩っぷりを発揮して君臨している。聞いたところだと下駄箱にラブレターが入っているらしい、女の子から。

……昔から入ってたわよー、とか気楽に言ってたけど、そういうものなのか。

それに引き替え男の美形である一成はラブレターが入っているとなにかこう、果たし状を投げ込まれた武芸者のような深刻な顔をして俺に相談してきたけど、それに比べると対照的というか……

遠坂は微笑んでいた。ああ、と軽く手を挙げて挨拶する。

「まさか。お前を呼び出しておいて俺だけ寝てたらなんて言われるか分かったもんじゃない」
「……放課後にもバイトで、家に戻ったらセイバーと鍛錬の後に私の講義でしょ?・まるで苦学生そのもののスケジュールじゃない。この学園探しても士郎より忙しない人間なんか居ないわよ」

微かに眉を顰めて、無理するのは変わってないわね――と言外に匂わせてくる。
そうは言ってもあと一年で遠坂の邪魔にならないくらいに成長するにはそれくらいしないといけないんだし、別に強いられて苦しい訳じゃない。

遠坂が俺の横に腰を下ろす。間近に遠坂が並ぶと、一瞬だけ緊張する。
わざわざ人目を忍ぶようにこんな屋上で逢瀬をすることはなくなっていて、なんと、恐るべき事に俺と遠坂の仲は全校に知れ渡っていた。というか隠さなくなったら、まず一成と美綴が驚愕し、そのまま全校に連鎖反応的に波及したと言うべきか。公認されたかどうかというと「なんで衛宮があの遠坂さんと!」と「えー、遠坂さんって見かけに寄らずかわいいもの好きなんですねー」という男女の意見の混合物が今の、状況だった。

……カップルと言うより、珍しい動物が生息していることを確認されたみたいな。
で、どっちが珍生物かというと、もちろん俺だろう。まぁ、穂群原一の勇ましいチビのトースター、偽校務員兼在校ブラウニー、自爆する紅いベーゴマなどと伊達に呼ばれてはいない。

「……どれもこれも胸が張れないな、それ」
「?・?・?・」

胸の内の感慨をつい言葉にしてしまい、怪訝な顔で遠坂に見られる。

3

彼女は横で、弁当を広げている。ここは恋愛ちっくに遠坂が俺の分の弁当も……というのが定番なんだろうが、二人とも弁当持参で、それも手製。まったくもって男女同権だ、なんかロマンチックじゃなくて泣ける。

横でパニーニらしいものを摘んでいる遠坂を横目に、俺も弁当を開く。

「で？　士郎？　朝も朝で忙しそうだったけど……私に話があるって」

「あー、そうそう。ついのんびり昼食してて忘れそうだった」

白いご飯と紅い塩鮭の和風コントラストに思わず日本情緒の中に引き込まれた俺は、箸を止めて頷く。遠坂と一緒に飯を食うことが多くなったからか、違和感を感じないと言うか……

首を伸ばして、遠坂のランチボックスを覗き込む。中には焼き目の綺麗に入ったパニーニがある。曰く焼き型さえあれば見目は良いとも言うけども……

「何？　欲しいの？士郎。でもサンドとその和風のお弁当だと交換比率が難しいわね。その鮭が甘鮭でご飯があきたこまちかコシヒカリで漬け物が手製だったら考えなくもないけど」

「いや、魅惑的な提案だけどそれは今度にしておく。もちろんそれ、遠坂の手料理だよね」

あまりにも当然すぎることを聞く。遠坂もあまりにも当然すぎる為に、何の糸があるのかわからなそうな顔で首を傾げる。

「もちろん。あ、一事は士郎みたいに料理作るのがやたらに上手いのが居たけどね」

「そりゃそうだろう、きっとそいつにみそ汁作らせたら上手いんだろう……ってか、まぁ確認なんだけど、遠坂って家事炊事洗濯全部やってるわけか？」

人のプライバシーに踏み込み過ぎている嫌いもあるけど、聞かなくちゃいけない。

やっぱり何聞いてるのか分からない、という怪訝な顔。遠坂は手にある残りにサンドを口に運びながら、じろじろと俺を見つめている。

パンくずをぽんぽんと払っていた遠坂は、何かを思いついたように手を叩く。

そしてにま、と何かを企むあくまわらいを浮かべて……

「……大体のことはするわよ。時々お手伝いさんが来るけど……あ、士郎、こんど手伝いに来て？」

「う、うう……そもそも我が家のことで手一杯なんだけどな、食い盛りが二人いるし。まぁでも遠坂の頼みとあれば聞かない俺じゃないぞ」

えっへん、と胸を張って答えてみせる。遠坂の願い、というか恋人の願いと在れば大概のことは聞けるつもりだったのでなおさら。

ただ、自信一杯を装う俺にまたか、とばかりに仕方なさそうな顔をする遠坂。腕組みしてぬーと俺を睨め付ける。

「……まったく士郎は士郎ね、その辺少しは嫌がるとか抵抗するとかしなさいってば」

なんとなく気分を害している遠坂の気持ちも良く分かる――つもりだった。

でも、俺はふっとニヒルに余裕の笑いを浮かべてみる。

「でも、もちろんタダでってわけじゃなくて、遠坂がこの条件を呑んでくれるならば、だけどな」

魔術師の世界は等価交換だろ？とかっこつけてみる。

……でも遠坂はなんというか、俺を風邪でも引いて譫言を言ってるのか？ってうさんくさげな瞳で……おまけに掌を伸ばしてきて、俺の額を触る。

ぺた、と遠坂の手が触れるのは嬉しいけど、どうにもこれは馬鹿にしているゼスチュアだ。

「……脳の病ではないようね、士郎は」

「なにげにひどいこと言うなお前も。そもそも家事形態が純和風の俺は絨毯敷きでアンティーク満載の洋館なんかどうやって掃除すりゃ良いのかわかんないし、お前に家のキッチンもあれだ、炊飯器無いし、レンジっていったら電子じゃなくてオーブンレンジだし」

それも薪炊き。あれはびびったな。魔女の宅急便かよお前の家、って。

手を離して遠坂はむ、と唸る。まぁあいつも俺の家に来て、畳の上に座ってると異様に落ち着きが無くなるので、その辺の生活環境の違いはよく分かるんだろう。まぁ仕方ないわね、とか呟いているのも聞こえたが――

「ふむ、だから代価が欲しいと。何が望みか言ってみなさいな」

でも交渉の主導権を握ってるのは私だし、士郎には貸しが多いし、足掻けるもんなら足掻いてみなさいって感じの遠坂の笑い。ああ、それは事実だ、衛宮家の未納上納金だけで俺は遠坂にこき使われても文句は言えない。

だけど、今日ばかりはあいつをあっと言わせる事が出来る……
あー、と声を出して咳払いをする。
流石にこんなことをノーモーションで言うのは勇気が要る。だから、まずは尋ねる。

「つかぬ事を聞くがな、遠坂」
「ん?」
「やっぱり遠坂の家はお屋敷だから、あるんだろ、お手伝いさんが来ると、あれが」
……回りくどい質問だけど、いきなりずばっと聞けない。俺がもし無類の勇気が在れば一発で尋ねるんだけど、そんなこととてもじゃないけど……案の定、遠坂は何を聞かれてるのかわからない、という顔をしている。
そりゃそうだ、こんな聞き方されてわかったら、それがイヤ。

「……あれ?」
「そう……あれだ、うん、言うから覚悟してくれ遠坂」
「なによもう……士郎、あなた変よ?」
困ったような遠坂の顔。何かさばさばと遠坂らしく割り切れないいるのはきっと俺の鼻息が荒いからだろう。
むふふふふぶふふー、と肺から熱い息が鼻腔に吹き上がり、マフラーから出る排気のように鼻息となって吹き出る。ええい、落ち着け衛宮士郎、難しいことは何もない。
「……なによ、それって」
「使用人のメイド服あるんだろ?それ貸して?」

――――

――――

――――

すごい、遠坂の固有時操作に成功した。
遠坂がぴたーっとこう、灰色になって固まっている。いや、灰色に見えるのは心理的効果で、遠坂が顔を歪めたまま呼吸すら止めているのが見えるだけだ。俺の言霊が遠坂のハートをがっちりキャッチして離さない、この威力に感動すらする。
……そういうもんでもないか、うむ。

とりあえず遠坂の時間を止めている間に、箸を取り上げて手早く弁当を掻き込む。別に何も変な事言ってませんよおいらは?と平静を装いながら。
「……………………」
「うん、あるよな、遠坂の家にメイド服がなかったら俺は日本上流階級の欺瞞と不覚悟を呪うね、だからあるよな、うん、あると言って?　遠坂」
飯を食いながらそこまで言葉を重ねると、ようやく遠坂の喉がこくん、と動いた。
遠坂の身体に瘧のような痙攣が走る。
座ったまま、まるで活火山の鳴動のように。
来るな。そう思った途端に箸を置いて両手で耳を塞ぐ。さぁ、爆発――

「………しぃぃぃぃぃいいいいいいいいいいろぉぉぉぉぉおおおおおおおお!!!!」
うわ、きた、大爆発。
予想通りで耳を塞いでいても骨にビンビン来る。
ぐわーっ!と遠坂が横で激発していた。ツーテールの髪が吹き上がるオーラで逆流しそうだというか、顔が一気に般若みたいになるというか、その全身全てがこの俺を非難するために武装になると言うか――
「なっ、なっ、何考えてるのよあなたはっ!そんなめ、め、めいどめいどめいど……!!」
「メイド服。お仕着せ。エプロンドレスとカチューシャ。なんでもいいや、とにかく」
いろいろ言い換えてみようと思ったけども、豊富な語彙で煙に巻くことが出来ない。
遠坂の顔色は憤激故に真っ赤になったかとおもうと、呼吸と酸素が足りないようにすーっと今度は青くなる。いや、いろいろ忙しい奴だったんだな、遠坂って。
「そっ、そっ、そんなものウチにあるわけ――」
「なっ、無いとは言わせないぞぅ遠坂!　無いと言ったら泣くからな!」
我ながら訳の分からない脅迫だった。遠坂はぱくぱくと口を動かして居たが、不退転の覚悟の俺を察したのか、憎々しげに腕組みして一瞥くれてくる。
そういう遠坂の瞳に睨まれると、レントゲン照射されるみたいだというか……目を細く

5

して半ば敵意を込めた視線が痛い。

「いや、なんだ。交換比率は遠坂に任せる。俺の提案するレートは一日レンタルで十日間の家事を任されてくれましょう、ついでに昼に弁当も作っちゃうぞ、うん、悪い取引じゃないと思うな」

どんと胸を叩いてこの俺に任せろ、と言い切ってみる。

……でも、遠坂で腕組みと俺を探るような視線は止まない。口がへの字に曲がり、眉間に皺が刻まれて――まぁ美人の憂い顔を見るのは眼福ではあったけども。

でも、これ以上何か言うと殺す、という殺気を浴びせかけられるのは堪らない。

しおしおと箸を持ち直すと、残り少なくなった弁当を平らげる。ああ、この鮭の皮の裏の所に塩と油と味わいがぎゅーっと凝縮して白いご飯と相まって何とも言えないし、それに青菜のごま和えが日本の春の情緒を感じさせるねぇ……

……ごめんなさい。ちょっと現実逃避してました。

ちらりと遠坂を伺うと、眉がぴくっと動いて――

「士郎？　もしかして……もしかして自分が着るの？」

ぶべっ！

残り少なくなったご飯と口の中の混合物が暴発する。

遠坂っ、お、お、お前聞くに事欠いてなにを聞きやがる！というかご飯が気管支に入った――ぁぁぁっ、げはげはっ！

「やぁねぇ士郎、流石に私もXLサイズのメイド服なんて持ってないわよ。あ、士郎なら細身だからLでも入るかも知れないけど9号10号ってレベルじゃないし……それでもやっぱりその髪型にカチューシャは似合わないと思うわ、正直言わせて貰って」

「ぐはっ、げーほげほげほげほほほほほほほげげげーっ！」

「それに胸は？　カップ入れるの？　見えないけどすね毛剃るの？」

「げばはぁぁぁあああ！」

のたうち回ってこの、突然の宣告と逆流した昼ご飯の苦痛と闘う。胸を乱打して今は一杯のお茶のためなら親兄弟を売りかねないという苦痛と闘い、その厳しい戦いに勝利を収める。ぜはーぜはーと喉が鳴るが、それでもきっと遠坂を睨んで言い返す。

「そんなことあるわけ無いだろうっ！　俺が着てどうするんだよ俺が！」

そんな趣味ねえぞうがー！と吠えると、このおなごは髪を掻き上げてあら、意外ねみたいなからかう顔で……ぬぬぬぬ。切り返しの早いこの女こあくまめっ！

遠坂はへぇ、と何か珍しいことでも知ったような顔で喋り始める。

「んん？ちょっと不安だったの。士郎が家事洗濯大好きの主婦少年なのはもしかして幼い頃の心理的外傷が原因のジェンダーの不一致であって、それでとうとう女装することに精神的な安定を見いだすようになったのかって――」

うわ、したり顔で人を心の不自由な人のようにまるでおにあくまのような事を言いますよこいつは。

自分で言ったことを真に受けてそれはいけません、お姉さんは許しません、と唸る遠坂。

「もし士郎がそんな性癖を抱えているのならばむしろこの遠坂凛様が直々にカウンセリングとメンタルケアで士郎を世間に恥じない普通の男の子に戻して上げないと――」

「安心してくれ、その、夜のあれやこれでそんなジェンダーの不一致なんて言わせるかい」

むむむぅぅぅ、と俺が言い放つ。

それはこう、学校でお日様の高いうちに口走るような内容じゃないし、もし誰かに聞かれていたらもうそれだけで大ピンチな内容だった。だけどこうでも言わないと遠坂が――

遠坂の顔にぽ、と朱が点る。俺の言葉の意味が分かったらしく遠坂も恥ずかしさに怯んだようだった。もちろん、言うまでもなく俺も顔真っ赤で怯みまくり。

ふ、と二人の間で何とも言えない沈黙が流れる。

春の風に、校庭からの昼休みのざわめきが乗って聞こえるだけ――

「な、なによもう士郎ったら……じゃぁ士郎が着るんじゃなかったら誰が着るのよ？」

「俺が男だというのをまず脇に避けないで欲しいな、遠坂――もちろん俺は着ない。遠坂が着てくれと言っても涙を流して反抗する。だから安堵してくれ」

なんとか会話が復活するけど、なんというのか気まずいというか……まずは俺と女装から話が離れて欲しかった。いやほんとにほんとで。
遠坂に頼むのはそーいうことじゃなくて、そのもっと別の目的が、ある。
俺が着ない、というのになにか遠坂がご機嫌斜めのご様子で……いや、首肯したらこんなもんじゃ済まないだろうけど。そもそもメイド服、と言った時点で駄目なのか、これ。
「……で、だな。遠坂。もちろん床の間に飾ってしみじみと鑑賞しながらお茶を味わう訳でもないぞ」
「そういうフェティッシュな趣味が士郎にあったら驚くわよ……で、誰が着るの？というか、着せるの？」
遠坂がむー、と唸りながら聞いてくる。というか、当然先に聞かれる筈なのにえらい遠回りをしたもんだ。
……そこのところが黙って、遠坂の女親分としての気っぷの良い度量で黙って貸して欲しいところだったけど……
「やっぱり、言わなきゃ駄目かね？」
「……気にならないとまでは言わないけど……聞かないと貸すわけにはいかないわね」
口を尖らせてのお言葉、至極ごもっとも。
弁当の最後の一口まで口に入れると、箸をしまって蓋を乗せる。そして布巾で包みながら心を落ち着けて……くっと首を上げると、意気昂然を装って遠坂に、言う。
「セイバーに着せたいから」
「……」
遠坂は俺の顔を睨みながら、残ったサンドを口にくわえる。
しばしの沈黙、遠坂はもきゅもきゅと残りの昼食を食べながら、俺の顔に浮かぶ如何なる表情も見逃すまいといわんがばかりに無言の観察を続けていて――なんか険悪というか、査察対象発見というか。
「で、その心は？」
「セイバーはサーバントだけに、メイドサーバント……」
……い、言ってしまった。
そもそもこんなことを遠坂に頼むに至った、そもそもの切っ掛けである思いつきを。
出来れば秘密にしておきたかったんだけど、そういう聴き方をされると言わないのはマナー違反と言うものだろう、いや、多分。
でも、空気が何とも居たたまれない。
たらー、と冷や汗が垂れる。春なのに、風が冷たく感じる、すごく。
「……お、お後が宜しいようで」
遠坂の唇に山田君、座布団全部取っちゃって、の声もない。
綿密で計画好きでそのくせに間が抜けて飛躍する遠坂らしくここはどうやってセイバーに着せるのかとか、メイド服のスカート丈がどれくらいがいいのか、とか士郎の家だったら割烹着の方が似合うんじゃないの？とかそういう詰問混じりの質問を矢継ぎ早に次々に浴びせかけて欲しかった。
だがしかし。
遠坂は腕組みし、あらぬ方向を睨んで眉間に皺を刻んでいる。
なんかこんな顔を見るのは久しぶりで、突然現れた大敵に如何に戦うのかを考えあぐねているような……って、俺が悪いこと言ったか？やっぱりこのネタが不味かったのか？
今なら土下座して遠坂の靴を舐めれば許してくれるかもしれない、とか衝動的に考える。
……後ろ向きにも程があるけど、その、無かったことにしてくれないと遠坂との今後の関係に重大な支障が発生して……
でも、遠坂の様子はそんな緩和措置も許さないように張りつめていて。
「ごめん遠坂、この事はわすれ――」
「……そんなこと……させるもんですか……私が……」
遠坂の唇がそんな言葉を呟いた――ように聞こえる。
いや、もっとなにか長い言葉を口にしているけども、聞こえたのはそこだけで。なんか剣呑じゃないな、と思うと……忘れてなかったことにして、と言いさした俺は遠坂の様子を窺

7

う。

ぱたん、とランチボックスを遠坂はを畳んだ。

相変わらず空の彼方を凝視する彼女は、きっと凛々しく立ち上がる。吹く風に長い遠坂の髪が揺れ、その横顔には決意が曇ることなく宿っていて――って、どうして？遠坂がなんで？

……な、何が起こってる？何が起こってるんだー！？

「士郎！」

「はいいいいいいいい！」

いきなり俺の名前を叫ばれ、俺はこの防水加工の屋上の床に正座する。

膝に手を置き首を垂れ、まるっきり説教されるスタイルで遠坂の罵詈雑言に堪えようとする。こんなこと思いついても遠坂に頼むような事じゃなかったと、後悔しそうになるけども……

だからといって桜に頼んだり、自分で買いに行ったり出来るもんか。

遠坂が片手にランチボックスを抱えながら、びし！と俺に人差し指を突きつける。

そんな目一杯心臓を指さされると呪われるんじゃないかと不安になるほどの遠坂のみぶりであって、俺は首を縮めて次の言葉を待つ。

「も、申し訳ありませなんだ遠坂さま……」

「士郎、それで勝ったと思ったら大間違いよ！首を洗って待ってなさい！」

「な！？　なんでさ？」

え？なんですか？その御言葉は？

首を上げて遠坂の顔を伺うけども、そこにあるのは強情な決意に顔を強張らせる、きっと俺に据える瞳があった。それは二の句を俺に許さない迫力があって――

くるっときびすを返し、肩を怒らせて遠坂が去っていく。

それに言葉をかけ損ね、おれは屋上で正座したままその背中を見送るばかり……

「士郎、ふふふ……覚悟することね」

か、か、覚悟ですか？何の覚悟ですか？殺されますか俺は？

そんな不敵な笑みを残して遠坂は、屋上から去っていった。

……なんなんだろう、あれは。怒っているといえば怒ってるけど、なんかそれ以上に不気味な……いい知れない何かの間違いを、複雑に絡めてやってしまったような思いに駆られる。

――それに首を洗って待ってなさいとか、覚悟しろとか、なんなんだかもう。

足を崩してそのまま、壁にぺたんと背中を預ける。

一体何がどうなってしまったのか、把握が出来ないままに俺は始業のチャイムまでそのまま聞くことになってしまって……

§　§

とりあえず、労働は善なり。為すべき事はそれだけだと頭の中を空っぽにして働いた。

ネコさんにはなんかエミヤんは正体抜けてるねー、大丈夫かね藤村にいためつけられるんじゃないだろうねどれアタイが慰めてあげようこっちにおいで、とか言われたけどなんて答えたか分からない。タイムカードを押してお疲れ様でーす、というまで実に短かった様な気がする。

……はっきり言うと、これも防衛機能というか、自己逃避というか、思考停止というか。

昼休みのことは迂闊と言うしかない。セイバーに着せたいから遠坂にメイド服を貸して、というのは阿呆もいいところの所業だろう。ただ、それを見たいやりたいと思った俺は事実だから、それをさかのぼって無かったことにしたいとまでは思わない。

でも、それで喧嘩した、という訳ではなく、遠坂の反応は挑戦を受けて立つというか――一体何がどうなったのかさっぱりな対応だった。肩を怒らせて立ち去った遠坂と、あれから遭遇する機会がない。

顔を合わせてもなんて言ったらいいのか……この魯鈍さを謝るしかないか。

夜の市街地をとぼとぼと歩き、住宅街の坂を上る。一戸建ての造成地を越え、造りの大きな近所に掛かる。家ではまぁセイバーが腹を空かせて待っているんだろう、それに藤姉まで重なると欠食児童ユニゾンで、手早くたくさん美味しい料理を作らないとぐちぐちと後を引く。

朝に小鰺を揚げてマリネしてあったからそれとご飯と、おみおつけはぐっと渋く赤出汁で

いくかな？副菜は豆腐か煮豆か、動物性蛋白に植物性蛋白でバランスを取る、しかしセイバー相手でお魚メインだともう一品欲しいなぁ、うーむ、困った。冷蔵庫の中に何かあったか……

気が付くと、続く塀に門の明かりが見える。もう日は落ちて久しく、白熱灯の門灯が我が家の温もりを感じさせてくれる。帰るべき我が家と待ってくれる人がいるから、落ち着いて仕事を済ませてから後のことは考えよう。

門を潜って扉を開ける。そして帰りを告げようと声を上げて……

「ただいまー、今戻ったぞいー」

目の前に、それがあった。

白と黒のコントラストと、柔らかな布のドレープとフリル、そして……

「おかえりなさいませ！　士郎さま！」

え？！え？！えええええええええええええええ？？？！！！！！！

§　§

「大丈夫ですか？　シロウ」

「ああ、大丈夫大丈夫、えーっと、晩飯はまだだっけ、済まない済まない作らなきゃな」

目の前で心配そうに俺を覗き込むセイバーに、そう声を掛ける。

で、いま、俺は何をやってるんだろう。ここは今で俺は卓袱台に着いていて、向かいにはセイバーが座っている。彼女のエメラルドの瞳が落ち着き無く俺を見ていた。

はぁ、とセイバーが不安げに首を振る。

「シロウ？　今食べたばかりではないですか？」

「え？なんでさ？　そうなの？　ありゃ？　ありゃりゃ？」

視線を落とすと、俺の前にからになった食器一式が並んでいる。それもちゃんと箸まで揃えてあって、いままさにご馳走様、と言い終わった後の様だった。

間違いない。俺はここで夕食を食べたらしい。セイバーの背後にある時計は、俺の最後に記憶している時間から軽く一時間経過している。

……まずい、全然覚えてない。

最後に記憶があるのは玄関で、そこでこけて頭でも打ったのか全然記憶がなかった。俺の中からすっぽり一時間の記憶が盗みされれてしまったかのように、そこに空白が残されている。

いや、転けたんじゃない。何かが玄関にいたんだ。

その瞬間に俺が、キャスターに遭遇したように固有時操作か精神時制調整かなにかを受けてこんな風になって、おまけにのうのうと飯まで食ってたと言うことか。一体自分がこの一時間に何をやってたのかの不安だけが胸を締め付けるように――って。

なんで、俺は俺の家でサイコホラーかサスペンスまがいに悩まなければいかんのだ。

目の前のセイバーなら一部始終は知っているのかもしれない。俺が倒れればセイバーが必ず駆け付けるわけだから。少なくともこんな記憶喪失、いや痴呆状態になった理由くらいは知ってるだろう。

「そうだ、セイバー……」

俺が尋ねようと顔を起こすと、セイバーはまた何か信じられない脅威が現れたかのような顔をする。変だ、こんな顔をやたらに今日は拝んだような気もする。デジャヴ？

いや、セイバーが見てるのは、俺と言うより俺の後ろ。

「はい、士郎さま。食後のコーヒーでございます」

「あーうん。どうもありがとう……」

横から差し出されるカップを受け取って、返事をして、ちゃんとネルドリップで出された

とおぼしい香気の高く深みのあるコーヒーを口に収め、セイバーが言葉を失っているのを見て、ようやく気が付いた。

「…………………………………………」

だれだ、その士郎さまってーのは。
それに、なにか、この夕食もコーヒーもお前が……それに、この声色。
俺は慌てて横を振り返った――――

遠坂！？って、なンで？
なンでお前がそンなッ！ッッ！ッッッッッッッッッッッ！
メイド服ぅぅぅぅぅぅぅぅぅうううううううううううう！？！？

――――――

――――――――――

――――――――――――――――

§　　§

――――――――――――――――

――――――――――

――――――

「もー、士郎ったらおかしすぎ……ぷくくくくくくくく………」

ベッドの上で、メイド服が腹を抱えて身体をくの字に折って笑っていた。
いや、メイド服が、じゃない。メイド服に身を包んだ遠坂が、いままさに俺が間抜けすぎて笑い死にしそうなので助けてください、とばかりに。

……というか、メイド服。
肩のふくらんだ長袖とくるぶしまであるロングスカート。それは黒で、白い肩フリルのあるエプロンとカフス、それに襟元のコントラストが綺麗だった。さらに襟元は紅いリボンで飾ってあって、カチューシャもある。如何にもメイドです、という記号に充ち満ちた服装。

イリヤスフィールのお城にもメイドは居たけど、あれよりももっとこう、メイド。メイド、という形容詞が成立してしまう、今の俺の脳みそ。それほどに目の前の遠坂のメイド服姿の威力は強烈だった。

なにしろ二回ばかりそいつと直撃したときに、意識を根こそぎ持っていかれた。葛木宗一郎やアーチャーやギルガメッシュとも戦ったけども、見た瞬間に意識が飛ぶほどの威力はなかった。いや、そういう戦闘力と遠坂のメイド服姿は違う軸で評価しなければいけないのだし、実数の破壊力と複素数の破壊力の差というか。

とりあえず、脳みそが鼻や耳からこぼれ落ちて消えてないかが不安で、こつこつと頭を拳で叩く。量と密度は自信がないけど中身は辛うじて残ってるようだった。もう一回気絶したらきっと、この頭蓋骨の中の頼りない灰白色のムース使い切ってしまうだろう。

「遠坂、その、なんだ。それは……」

ようやく見ても気を失わなくなっているけど、目に毒としか言い様のない遠坂を見る。ベッドの上に体を起こした遠坂が、まだくすくす笑いながら俺を見ている。細身の遠坂の身体に実に良くメイド服が似合っていた――そも、遠坂が似合わない格好というのがないのだけれど。

「いやいや、士郎ったら初なのは変わらないわねー。士郎さまぁ、って呼んで上げたら目が点になっちゃって、そのまま夢遊病みたいにふらふらーって着いてくるんだから」

思い出したようにぷくく、と遠坂が肩を振るわせる。それと一緒に白いカチューシャも揺れた。遠坂第二のねぐらであるこの客室で、ベッドに腰掛ける遠坂とその傍らで案山子のように立つ俺。何故案山子かというと、今の俺の思考能力はそんなもんだから。

……遠坂のその姿が側にあることだけで、身体のどこかがおかしくなってしまいそうな。目をつぶって頭を振って深呼吸をして、精神集中すればきっとこれが何かの幻覚で、遠坂はいつもの格好をしているんじゃないかとかんがえる。そうして目を閉じても――

「面白かったわよ、あれ。ぼーっと遠くを見ても士郎はちゃんとご飯の最後の一粒まで平らげるんですもの。セイバーが大丈夫ですかシロウ、凜あなた一体何をしましたかって不安がってるし、それに意識を取り戻してもコーヒー受け取った瞬間にまた瞳孔飛んじゃうし」

10

……目を開いても、メイド服。
遠坂はベッドの上に腰掛けて、あしをぷらぷらと振っている。まるで悪戯に成功してはしゃぐ子供のようで――というか、そのままそれ。学校の女子制服のスカート丈も長いけども、今の遠坂の足はもっと長い、豊かな襞を作るスカートの中にあった。
「いやもう、ビデオに撮影して藤村先生に見せたらさぞや……」
「いや、藤ねえは勘弁してくれ、シロウになにをするのこのコスプレ女ー！って爆発するから……っていうか、おまえ、それ」
ようやく遠坂の服に指をさし、指摘する心の余裕が俺にも生まれる。
これ？とスカートを摘んで上げる遠坂だったが……
「藤ねえに見られたらどー言い訳するんだ、というかまず、なんでお前がメイド服着てるんだよ」
「ふふふん、私の家のメイド服を借りたがっていたのはどこの誰かしらねー」
したり顔でおっしゃる遠坂凛。それにぐうの音も出ない俺。
一体どこの誰だろうな、としらばっくれる腹の太さがないのが悔しい。そもそも俺が言い出さなければ校も成らなかったはずで……そう思うと俺の功罪は半ばだろう。いや、メイド服姿の遠坂をみられた、と言うだけで大幅な勝利だと言えなくもないが。
返答の代わりに、だまって手を挙げる。
まるで小学生のホームルームで悪いことをして手を挙げさせられる生徒のような惨めさ。
「……はい、衛宮くん。お望み通り我が家の使用人の服装よ？お爺さまやお父様の頃には使われていたみたいだけど、私の代では箪笥の中に入れっぱなしだったわ。久々に風を通してみたけど、あの頃の服は手が込んでて今でもちゃんと着られるものねー」
遠坂はベッドから立ち上がると、くるり、とその場で一回転する。初めて着たドレスを喜ぶ女の子のように……いや、流石に遠坂も初めて着るんだろう、これを。それなのにサイズとかばっちり合っているのは感心する。
目の前で、遠心力でふわりと舞うスカート。純白のエプロンのフリルと、背中に結ばれた蝶結びの腰紐。いつものツーテールの髪に乗っかった白いヘッドドレス。
やっぱり、俺の家にそんな服を着た遠坂が居るということが信じられない。
やっぱりそんな、蠱惑的すぎる遠坂に顔を合わせれなかった。見続けているとこう、理性の歯止めが利く自信がない。
視線をとりあえず部屋の片隅に向けて、ああ、と低く頷く。
「……で、これだけど。本当にセイバーに着せるつもりだったのか？」
「……」
イエスというか、ノーというか。無計画にも程があるが、とりあえず借りてから考えることにしていた。もっとも遠坂から借りるよりも、セイバーに着せる方が遥かに大変そうだったけど。
答えに窮して頭を掻きながら、口ごもる言葉をなんとか……
「いや、セイバーなら似合うんじゃないかなと僅かな期待と希望が……そう思わないか？遠坂？」
「セイバーももっと着せ替えさせたいわよね、うん、その気持ちは良く分かるわ、素材としては極上なのは認める」
遠坂が頷いている気配がするが、そっちを見られないので確かめようがない。
確かにこの遠坂のメイド服を着たセイバーというのは大変だろう、うむ、遠坂でも犯罪的だけどセイバーとなるともはや軍法会議ものというか、宗教裁判ものというか、セイバーにそんなことしたと知れたら英国民に生きて顔向けが出来ないほどすごくなるに違いない。
……でも、じわじわっと遠坂から腹立たしげな気配が押し寄せてくる。
何を一体腹を立てているのか……そういえば、屋上でもセイバーの名前が出て来てから穏やかじゃなかったよな、うん。
「……似合うわよね、うん。自分で着て姿見見てもちょっと素敵だなって思ったのに、これが金髪碧眼痩身のセイバーだとね、このデザインは英国が本場だし……ううむ……」
さらっと自意識過剰なことをおっしゃる遠坂だったけど、セイバーのことを口にするとそんなことも気にならないほどに悩んでいると見える。いや、一体どこにそんな深刻なネタがあるよく分からないんだけど……
「士郎？」
「あ、ああ……」
「でも、セイバーに着せて何するつもりだったの？」

……何するつもりだったんだろう、俺は。

そう言われて、はたと腕を組んで考える。そう、セイバーにメイド服を着せたいと思ったのは事実だけど、着せて何をしたいというのは何も考えなかった。そこまで考えが及ばなかった、というか……ふつっと、そこで俺の計画は全て途切れている。

知らず深刻さが増す。俺は遠坂やセイバーを怒らせ、はてまた露見したら虎竹刀で藤ねえに半殺しにされ桜から軽蔑されおまけに穂群原全校集会でつるし上げと人民裁判と自己批判に興じる羽目になる危険を冒して、何をしたかったのか――

何したかったんだ?-メイド服で。

いや、メイド服に何をしたかったんだろう?

「……」

「もしかしてこの格好でセイバーに家事洗濯を任せるとか?-でも、士郎が台所と洗濯場を人に明け渡すようには見えないし。もしかして、サーバントだけにメイドサーバント、ってそんな駄洒落が全ての動機だと言わないわよね」

――いや、遠坂、それビンゴなんだけど。

ただ認めてしまうと俺の人格の尊厳の価値が大暴落するので、頷けはしなかった。だけど、それでも凍っているとどんどん遠坂の不機嫌さは増してきて……いや、顔を見られたもんじゃない。

「もしかして、士郎……ふーん、そうねー、士郎も男の子だからねー」

「……」

なにか、すごく不味いことになっている気がする。というか、遠坂が何かを想像していて、それが俺にありもしないことを……め、メイド服ですること?-家事洗濯、それもある、でもこの現代日本に於いてはこのアイテムは――

ごくっと唾を飲むと、震える声で弁明する。

「いいやぁそのあれだ、遠坂、ご、誤解だぞ?-」

「誤解?-まだその誤解と判断される、仮定の見解にも私は辿り着いていないんだけど」

「と、遠坂お前のその『男の子だからねー』ってーのはあれだろう、俺がセイバーにメイド服を着せてそのまま押し倒し手込めにしてあんな事やこんな事なんかのよからぬ事を企もうと考えているに違いないってことだろう、そ、それは誤解だぞう!」

一気呵成に言うと、ぶんがぶんがを手を振る。

なにか自分で墓穴を掘っているような気がしないでもないが、今は巧遅より拙速を重んじる訳だから……で、でも遠坂の気配は冷ややかで。

「ふーん、制服はそれだけで一つの恣意的な概念操作を持つものだからね。士郎も押し倒して手込めにして企む良からぬ事をこの服に期待してたんだぁ」

「だっ、だっ、そ、それはお前の思いこみでもあるだろう!」

この誤解がどっかに行くのなら、いっそ肘から腕がちぎれてしまえと手を振り回す。

遠坂の疑惑を回避する為にはおれは息せき切ってまくし立てなくてはいけない――

「そ、そんなセイバーと俺は確かに元はマスターとサーバントだけど今のマスターはお前だからそんな第三者である俺がその主従関係を口実に肉体関係を強要するなんて事はお前だって百も承知だろう! それにたとえそうであっても俺がセイバーを手込めになんかしようとしてみろ、蹴り出されて襖と雨戸を突き破って庭を飛び越えて壁に叩きつけられるに決まっているし!」

「でもセイバーは士郎を良からず思ってるわけだし、士郎なら食べ物で懐柔するって手もあるわよねー」

あっ、あっ、あうう、遠坂お前って奴は俺をなんだと……

気恥ずかしさと後ろめたさでしっかと顔を見て言えないのが苦しいけど、そっぽを向きながら弁明を続ける。

何か遠坂は遠坂でごそごそやってる様だったけども、それにまで気は回らない。

血が頭に巡ってくらー、っとしているけども思いつくままに……で、遠坂が妙な風だったけども構わずに。

「そんなセイバーが食い物で懐柔されるわけ……な、無いとは言えないんだけどな、お肉大好きご飯大好きお魚大好きだし。でもあれだ、俺とセイバーは同じ屋根の下に住んでるけども、そんな世間様に顔向けできない後ろ暗いことは何もないぞ!-天地神明に誓ってそんなメイド服を着せてあんな事やこんな事だなんて一片たりと――」

……？

しかし、遠坂がなにをやってるのか……さっきからごそごそごそと。直視こそ出来なかったけども、俺の話をなんとなく聞いてないように視界の隅で動いていたけども、ようやく横目で眺めると、ぽんぽんとスカートを払って身体を起こしていた。

？

いや、なにやってるんだか。でもそれよりも。

「一片たりとも無いと！　セイバーに膝を詰めて腹を割って聞いたって良い、寝室があれで襖一枚であれほど理性を保つ男は古今東西、実はホモセクシャルでした、というオチでもない限りないはずだぞ！」

「柳洞くんみたいに？」

「……お前は鬼だな遠坂、そんなもし本当だったら俺のキンタマ縮み上がるようなこと言うなってば」

「ふーん、まぁ士郎の言うことはウソではないみたいね……」

な、納得してくれたのか？それでも妙に譲歩条件の多い了解の薫りというか。

ようやく遠坂の顔を見ることが出来る。あいつはメイド服姿でなにか、踏ん張るように肩幅に足を開いて腕を背中に回して立っている。それに奥歯に何かを噛みしめているような、今ひとつうち解けた顔じゃなくて……怒ってるのか、まだ。

「とにかく、あれだ。メイド服までが目的で、メイド服からの目的がなかった。それは認めよう」

遠坂はふーん、と意地悪く鼻を鳴らす。

でも、何を思ったのかぷいっと視線をそらす。え？と思うのはそれが何かを恥ずかしがるようで……

「……じゃぁ、士郎？　私がこういう格好をしていても……その、そういうことしたいって思わないの？」

何？え？その、何を遠坂が言ったのか、そのニュアンスが全然分からない。いや、分かってしかるべきなのに心の中の安全装置がそれを許さない。遠坂のむすっと怒ったみたいな顔だけど、頬に微かに朱がさしていて……

め、メイド服で？そういうこと？

なにがいったい、その、遠坂の言うことは一体その、なんでさ！？

「……え？　ええ？　え？」

「もう、士郎ったら私がせっかく着てるのにセイバーセイバーセイバーって彼女のことばっかり……」

ぶつぶつと不満そうに口内でなにかを呟いている遠坂。いや、セイバーのことが一番の懸念の課題だったからそれのことを口にするのは当然……な、筈だけど。

遠坂は顔を伏せて何かを呟いているけども、せっかくサイズ合わせたのにとか甲斐性なしとか、なにか聞き取れる言葉が少なかったけども……でも、こんなに会話の方向性を変える原因になってしまったのかが、分からない。

だけど、凛が顔を上げてしっかと俺を睨んで——

「士郎！」

「あ、あう！？」

ずかずかと遠坂が詰め寄ると、ぐっと俺の手を取る。

遠坂の意図がさっぱりわからないで、されるままに手を握られる。で、何かを掴まされた。それは布で、ほかほかとまだ温かくて……でも、確かめる間もなく遠坂の指がそれを俺に握らせて指を包ませる。

……これ、何だ？何を遠坂が？

遠坂はまるっきりご立腹……というのも違う。怒られている筈の俺がなにか、心の中で奇妙なときめきを感じてしまうような不思議な怒り方。このまま俺と遠坂の時間が周囲より遅く感じるように濃密で……心臓の打つ音、声と息がひとつひとつが時間の綾糸に刻まれるように。

「……」

俺に何かを握らせ終わると、遠坂がぱっと二三歩後ろに退き、ふくれっ面で俺を睨む。

遠坂と俺の拳を交互に眺める。こくこくと紅い顔で頷く遠坂は無言で、それを開きなさいと言っているようで……

指が自分の意志に従えないように、強張る。

でも、外からバネで締め付けられたような指をゆっくりと力を込めてこじ開けていく。中には白いものがみえる、布地だ、それは間違いない。でも俺の握力に握りつぶされたそれの正体は何なのか、まだ――

「……これ、って……」

こくん、と一段と深く遠坂が頷いた。

俺の手の中にあるそれは、レースの白い生地で造られた小さな布きれで、まだ暖かみを帯びていて――俺の記憶が間違えていなければ、いや、間違いようがない。これを遠坂が渡してくれたと言うことは、これが遠坂の――

なぜか、俺は遠坂のショーツを握っていた。

信じられない。顔を上げると――

「……士郎？　見て……」

頭が動かない、いや、動くことを拒絶している。思考がぷっつんぷっつんと途切れ、直線的な意識を為さない。ただ時間と吐息の縦糸の中を、織りなす模様を知らぬ横糸を通す杼のように、俺は遠坂の言葉を聞き、その姿を見る。

遠坂の姿が、抱きしめたいほどに頼りない。

その黒と白のメイド服がほっそりとした遠坂の姿をより一層引き立てていた。遠坂が手を伸ばすと、スカートをエプロンごと摘む。

遠坂は顔を紅くして、ぐっと俺を睨む。それはこう、一体この男はどういう権利があって私にこんな恥ずかしいことをさせる権利があるのよ、と恨むような……それに、隠しようのない興奮に身を委ねているようにも感じる。

ベッドを背に、遠坂との距離は二歩。だがその間に手を伸ばしても届かない、空間の歪みを感じるというか――俺の息が上がって、頭にキているためか。

「……」

遠坂のスカートの裾が、徐々に上がっていく。

黒いローファーのパンプスが黒いストッキングに包まれた細いがその裾から現れていく。なんで、遠坂はそんなことをするのだろうか？このまま持ち上げていくと当然スカートが捲れていくわけで、どこまで遠坂が上げる気だか分からないけども……もし胸より上に遠坂がスカートを持ち上げると、やっぱりショーツまで見えてしまう。

――待て。そうなると今俺が握っているこれは、何だ。

「……」

精神が歪み、思考が飛ぶ。当然俺が握っているのは遠坂のショーツで、ごそごそしてたのはそれを脱いでいたからだろう。それに遠坂がスカートを俺に向かってめくり始めている。それが意味するところは畢竟――だが、そこの先に辿り着かない。

頭の中では、零を0で除算し続けるように、思考の理解が断絶しつつける。それなのに、むすっと怒ったような遠坂の顔だけが網膜の底に染みて、その瞳、その唇、紅く差した血の気だけがタダひたすらに俺を――

当然分かるはずじゃないか、俺。遠坂がスカートをめくっていけば。

遠坂のストッキングの膝頭までめくられる。それを見続けるといけない、そのまま上がり続け、見続けると俺の神経は焼け付く。欲望が押さえきれなくなる、でもそれから目を離すことが決して出来ない。目を離してはならない、遠坂は恥ずかしさに堪えてこんなことをしてくれるのは……

何故？

理解できなくても良い。でも、早く早くと迫り立てるこの心臓だけが疎わしく。

「……と、お、坂」

彼女の名前を呼ぶが、言葉が途切れる。目の焦点が合わなくなり、遠近感が吹き飛ぶ。視界はモノトーンになって、遠坂のメイド服の黒と白だけが刻み込まれる。電灯の明かりなのにセピアに染まり、スカートの裾がガーターベルトで止められた太股まで上がる。

後もう少しで、上がるところまで上がりきる。

15

その瞬間に俺はどうなるのか、動作かはどうなるのか。遠坂の息づかいが俺に分かる、彼女も俺にこれを見せるために勇気をふるっていて、それを眺め続ける俺もただ呆然とする。いや、呆然としているのではない、そう装わないと叫びだしてしまいそうなほどに心が高ぶる――

「ふ、あ……」

その心の一線を乗り越えるために、遠坂の口から小さな吐息が聞こえる。

静寂の中に針を落とすほどの音。でも、それは遠雷の様に耳に響く。

遠坂は胸元までぐいっとその手を挙げる。裾の布地はペチコートの白いレースまで見えて、足首から美しくすらりと伸びる

そしてその足の曲線は、外はヒップに繋がっていた。ウェストのあたりから下がる黒いガーターベルトの線が、肌と対比を成す。

そして内太股の線は、ふっと黒い丘の上に消えていた。それは遠坂の股間に柔らかく茂った恥毛の丘で――今、俺の瞳の前に剥き出しになっていた。

胸元にスカートを止める遠坂の手が震えていた。

それに、あいつはほとんど泣きそうな顔で――メイド服で、スカートをめくり上げ、恥ずかしいところを露わにする彼女は心の中で堪らない欲望をそそらせてくれる――それは罪と禁断の味が苦く、だが甘く伝わる程に。

その味を、心のどこかで望んでいたのか？だから俺はこれを望んで……

そうだとも認め、そうで無いとも叫びたかった。とにかく、頭の中がぐしゃぐしゃで、喉が渇ききり、目がまともに動かないのに遠坂の恥丘に目は釘付けで――

「士郎……士郎は、こういうこと……したかったんでしょ……」

遠坂の声も、微かに震えている。羞恥のあまり死んでしまいそうな声で、一歩俺が遠坂に近づけばその心の限界を超えてしまいそうだった。でも、俺の足は床に釘付けされたよう動かない。いや、今身体をどうすれば動くのか、俺の頭は忘れてしまっている。

なおも遠坂の言葉が続く。息をすると、めくりあげられたスカートの上に見えるお腹が動くのが分かった。

「セイバーと……こんなこと……でも、私が士郎に……」

遠坂の滑舌が悪い。当たり前だ、こんなことしてるんだから。

こんなことをされる俺の方は、舌が口蓋に張り付いている。遠坂の言葉の意味は、俺がこんな破廉恥な行為をセイバーに望んでいたという疑惑ではなく、むしろ――それを口実にして俺を誘惑している。

こんな姿を見せられて、誘惑されてないと言うのはあり得ない。いや、俺の思いこみかも知れないけども遠坂の行動はあまりにもダイレクトに俺の意識に爪を立てて――

浅く速い遠坂の息。瞳は僅かに涙を溜めて俺を見る。

「でも……この服を着て士郎にこんなことをしてもいいのは、私だけ……」

それ以上、言って欲しく、また言って欲しくないような。

震える膝、露出する腰は瑕の無い楽園のように、俺を誘う。それは乾いた荒漠の野に溢れる泉のように、俺はそこに辿り着けば浴びるほどに快楽を――

「士郎……どうなの……私がこんなことしてるのに、士郎は――」

士郎、の言葉が遠坂の唇と、鼓動が速くなる。

床に釘付けにされた足を動かす。ぺりっとスリッパが床から剥がれるような音を聞いたように、俺の膝が持ち上がって――遠坂に向けての一歩を刻み出す。

スカートをたくし上げる遠坂は、恥ずかしさに怒っているような顔で。でもそれが堪らなく俺を興奮させる。こんな遠坂を前にしてなにもしないなんて、どうにかしないとなれそうにない。それにもう、目が俺の理性を焼き切ってただ本能の赴くままに、振る舞えと。

獣になりたい、そんな最後の一線は――ここまで俺にしてくれる遠坂への愛しさが防ぎ止めた。でも、こんな遠坂をどうして手を触れずにおけるというのだろうか？

「遠坂――」

最後の一歩はするりと歩めた。遠坂は間近に迫った俺を見上げ、メイド服姿の遠坂を俺は抱きしめた――仄かな香水と、樟脳の薫り。遠坂の身体は柔らかく、しなやかで、それが俺の腕の中にある。

遠坂の唇を塞ぐ。どうして良いのか分からないけど、遠坂の唇を吸いたかった。
俺からのキスに遠坂はほんのすこし驚いたように背を反らせる。でも、スカートを持ち上げたままで俺の唇を返してきた。柔らかく唇が触れ合い、粘膜同士が吸い付くようで――目を閉じ、焼けた神経を遠坂の唇の感触で癒そうとする。

「は……あ……ん……」

ちゅ、という唇の立てる音の間に、微かな吐息が漏れる。
何度も唇を吸い、角度を変えて遠坂の唇を味わう。それは今度は俺を求めるように吸い付いてきて、中に入ってきた舌を驚き迎え入れる。つん、と舌と舌が触れあう。
手を伸ばし、遠坂の太股に触れる。指に触れるのは複雑なレースの手触りと、ストッキングのきめ細かさ、それに肌の温もり。丁度ガーターベルトの辺りに触っているので、手を動かして内太股に触れる。

立ったまま、遠坂のスカートの中を撫でた。
手には遠坂の太股は吸い付くようで、上等な絹地を思わせる肌であった。いつもミニスカートで大胆に見えることもあったけども、見るのと触るのでは驚くほどに違っている。

「あ……や。士郎……そこ……」
「遠坂？そのままスカート持ってて……遠坂だから、したい」

唇に言葉を流し込む。遠坂はこくん、と頷いた。
胸に当たる彼女の手が、ぎゅっと強張るのが分かる。遠坂はこういう事になるといつもの強情さがウソのようにか弱くなる。さらに大仰なメイド服と、それなのにスカートをめくらせているということが重なり、狂おしい感情を覚えてしまう。

このまま遠坂を奪い尽くしていまいと。この服は生け贄に捧げられた晴れ着であると。
そこまで暴走する頭を辛うじて押さえつけ、手を少しづつあげていく。太股から遠坂の秘密の花園に、添えた手の横が触れる――

ひくっ、と遠坂の背筋が震える。合わせた唇がは、と息を吐く。

「はぁ……あ、あ……」

指には陰毛の柔らかな感触と、ふちゅりと湿った肉の手触りがある。指が当たるのは遠坂の割れ目で、そこに指を押しつけるの中身の襞が触れる。
指に濡れた、液体の感触を感じた。少し指を動かすとそれは、遠坂の声と共に……

「あ……ああ……士郎……んっ、あ……」

遠坂は濡れていた。割れ目の中から溢れ滴るほどではなかったが、その粘膜の襞を守る湿り気以上のモノがあった。遠坂の唇は俺との唾液に濡れ、その女性の奥底の襞は俺の指を愛液で濡らして……

「んっ、あ……や、ああん……そんなにしちゃ……駄目、士郎……」

指を繰ると、その液がまとわりついてくるようだった。
遠坂のそこを弄るのを止め、手を外してみる。キスする唇を離して俺と遠坂がよく見えるように手を掲げて見ると――

「あ……や、やだ、そんなの……」
「……濡れてたんだな、遠坂」

ごく当たり前のことを口にするのに、それがひどく淫らに聞こえる。濡れている、濡らしている、遠坂のあそこがこんなにきらきらする愛液の雫に濡れている、感じているんだろう遠坂？そんな言葉が一言の後に頭の中に溢れる。
その言葉を遠坂も感じているみたいだった。濡れた指の間に糸を引くのが自分の愛液で、それがスカートをめくって俺を誘った淫らな自分の本性だと、それを彼女が思い知らされ、そしてこれはまだ序の口に過ぎないから、もっと、と――

「ん……」

遠坂が、俺の指を舐める。
遠坂の秘所を触り、濡らした指が遠坂の唇に飲まれる。舌が感じた口腔の熱さに指が飲まれ、あそこよりも熱くうねる舌に絡みつかれる。そして、目を閉じて俺の指を舐める遠坂のその陶然とした顔が、俺の視界の中を占拠して――
遠坂の唇から、舌の絡みついた指が抜かれる。それはもっとぬるぬるに濡れていて、熱い。

17

かぁっと体の中に火が熾ったように、遠坂が舐めてくれたんだから俺もしなくちゃいけない、しないとどうにかなりそうだって欲望が吠え、腰の中でがつん、と俺の自分自身が立ち上がるのを感じる。だから、俺は遠坂に――

「ん……んぷ……な、舐めちゃった、士郎の指についた私の味……」

「じゃぁ、今度は俺が遠坂を味わうから。その手、離すなよ」

え?と驚く遠坂をそのままに、俺は遠坂の前に跪いた。

膝を折って床に座ると、ちょうど遠坂のお腹のあたりが目の前になる。スカートが持ち上げられ、遠坂のお腹とガーターベルト、それに白いペチコートが見える辺り。俺は手をふともに回し、さらに深く跪く様に――

「だっ、だめ士郎、そこにそんなことしちゃ――ああっ!」

「遠坂、そのまま……」

遠坂にスカートを持ち上げさせたまま、俺は顔を下腹部に付ける。

腕の中にある遠坂の腰がふると揺れた。遠坂が手を離してスカートをかぶせれば、真っ暗になるのは間違いない。でも、健気に遠坂はその裾を持ち続けている。

顎にしゃり、と柔らかな恥毛が触る。真っ正面から遠坂の秘密の丘に向かうと、口でその神聖な森を探り、遠坂の秘密の奥底を探る。指でさわって確かめた、遠坂の割れ目に――

乾いていた。その身体を燃え立たせ、血を激しく巡らせる熱い乾きは潤いを求めている。そしてそれを癒す聖なる泉は目の間にあって――

「やっ、だ、だめっ、そんなところ舐めたら私――っあ……」

くしゅ、と唇を動かし、舌で探る。遠坂の足をわずかに開かせ、その太股の間に顎を差し込んで開かせるように。目を閉じ、遠坂の感覚に没入する。

唇にはなま暖かく湿った肉が触れていた。間違いない、これが遠坂の聖なる裂け目であった。それは女性そのものの薫りに満ち、迷い込んだ俺を酔わせる。遠坂に唇でするのは初めてで、指で触ったり男性器で触れたりするのと、唇で触るのではあまりにもその感触は違っていて――

それも立ったまま、唇で遠坂の雌の部分に触れる。

俺が遠坂の腰を抱いていないと、倒れそうなほどに震えている。そして耳に聞こえるのは。

「ひゃ……あん……は、うう、は……」

なにかを堪えるような遠坂の声。そんな声を出す遠坂がどんな顔をしているのか、見られないのが悔しい。でも、唇が外縁部に触れただけでこれだから、濡れた襞の裂け目の中をかき混ぜあじわったらどんなことになるのか――

「いくぞ……遠坂」

「ま、まってその、心の準備……ああああああっ!」

舌をぬらりと侵入させる。

目一杯舌を伸ばし、遠坂の割れ目を舐め上げる。舌に伝わるのは不思議な愛液の味であった。でも、性感帯をねぶられる遠坂以上に、媚肉の柔らかさと湿り具合に俺の舌が、唇が融けてしまいそうで。

「ふぁ……あああっ、あん……ひぅ……はぁぁっ」

遠坂の膝が震えるのが分かる。がくがくっと抱く腰が動く。

でも、まるで自転車のサドルのように俺は遠坂の又を顔で支え、倒させはしなかった。ただサドルと違うのは、俺の舌が遠坂の秘所の中を探っていることだった。

ぬちゃ、と音を立てるのは、俺の唾液なのか、遠坂の愛液なのか。その水音がひどく淫らで、遠坂の中にこんないやらしい音を立てる部分があることを今更ながら思い知らせ、それが劣情となって身体を駆ける。

「士郎……や、やだ……そんな……ひっ、ああ……」

遠坂の身悶えが心地よい。そんな風に思えてしまうほど俺は――

舌が遠坂の中を探る。間近で見たりしたことがあるので、形はよく知っている。でも目を閉じて舐め、その舌触りだけでなにが在るのかを判断するのは僅かながらに難しい。

ここが襞の中の尿道、ここが右の小陰唇、それに伝って舐め上げ、あるかないか分からないくしゅんと縮まった所がクリトリスで、ここを遠坂は触られると……でも、したなら?

尖らせた舌で、襞の中の柔らかな実を舐める。優しく撫でるように。

19

「うあああああっ、や、はぁ――」

ばさっと音がして、頭の上に何か被さる。

遠坂が我慢できなくなって、スカートを手放したらしい。背中まで長いスカートが被るのが分かる……でも、もう身体に、奥底に触れ目よりも触感が頼りの俺には構わなかった。

ただ、被さったスカート越しに遠坂の手が俺の頭を掴む。それは掴んでないとどこかに崩れそう、と危険を覚えるような感じで。

でも、それに驚かずに俺は円を描くように遠坂のクリトリスを、皮の上から舐めていた。

「ひぃ……や、や……そこ、そんなに舐めたら……私……ふぁぁ……」

声がくぐもって聞こえるのは、スカートの中なのか。

でも、あの遠坂のメイド姿のスカートの中に潜り込み、剥き出しの女陰を舐めている。そんなことを考えるとその姿のエロチックなことにますます、止まらない興奮を覚える。それに遠坂の声からその顔を思い浮かべる。

甘く苦しい遠坂の顔が、ありありと目蓋にある。

間近に確かめられた無かったのが残念だったけど、いや……遠坂をいかせてからじっくり眺めるといい。そう心の中で決める。

幸いというか、舐められる快感に遠坂は限りなく弱いようだから――

手を腰からずらし、後ろからお尻を撫でる。

そして、その桃の中を割るように指を忍び込ませて。

「あっ、や、士郎、どこ触ってそこは……はう、ああぁっ！」

「お尻の穴。きゅっと窄まってるな、遠坂の」

そう答えたけども、遠坂に聞こえているかどうかは定かではない。

指に触れるのはお尻の中に隠された、肛門の窄まりだった。指の腹にちょんと触るたびまいはいっそ可愛らしくあったけども、これが遠坂の排泄器官だと思うと――

遠坂の排泄器官。それは遠坂が濡れた女性器を持つよりもあってはならないような気すらするのが不思議で、指を触れていることに興奮を覚える。

その肛門の菊の蕾を指で弄りながら、前の女花の硬い心をつつく。舌の腹に触れるそこは本当に感じる女性の秘所があるのかどうかいつも自信はないけども、遠坂が――

「あん、ああ……はっ、ああぁ、あは……ああ……」

俺の頭をぐしぐしを掻き回すように触りながら身悶えしている。

頬に触れる太股が熱い。その下にある筋肉は時折力が籠もって引きつり、遠坂の快感のリズムを感じ取ることが出来る。ぐらぐらと遠坂の身体は動いているみたいで、手を離すと倒れそうでおっかない。

でも、俺は遠坂の秘裂をただひたすらに舐め続けた。

唇と秘唇を宛い、舌を繰ってその中をかき混ぜる。愛液に顔を濡らし、スカートの中の暗闇を俺と遠坂の熱を籠もらせる。息苦しいほどの空間だけど、そんなに密接することが逆により一層俺に遠坂を求めさせて――

「はぁ、な……う、はぁ……ああああっ！」

遠坂の身体がきゅーっと絞られる。

俺の頭がわしっと両手で掴まれ、触れ合い唇を基点にして仰け反るような危なさに――

でも、今がその時だと直感的にわかったから、俺は……

ぶちゅうと音すら立てて、遠坂の秘裂を啜った。

舌がクリトリスの包皮をこじるように舐め剔って――

「ああああうぅぅーっ、あ、はぁ――」

遠坂が、快感に反る。

悲鳴のような声が挙がったかと思うと、ふっつと切れるようにその声が止んだ。遠坂の太股に締め付けられた顎が緩められ、そして……遠坂の足が重量を失うのが分かった。

くらん、と遠坂の身体が傾く。そのまま後ろのベッドに向かって崩れ落ちて――

「はぁー……はぁ……ああ……」

遠坂さかのスカートの中から解放され、俺は部屋の明かりを見る。

むわっと蒸すような布地の中でさんざん夢中に振る舞っていたので、部屋の空気が涼し

く感じる。まだ口の中に遠坂の肌と襞の味が残っていて、口元を拭うと強張った膝に力を込めて立ち上がる。

「は、やっと、遠坂――」

膝を払って立ち、遠坂を見た――途端に、がちっと心の中のギアが上がる。

遠坂に立ちながら口淫をしていたときにも興奮はトップギアに入ったかと思ったけども、全然甘かった。ベッドの上に居る遠坂の姿は、俺の脳みそがまだまだ上に上がれるって告げているかのように。

ベッドの上に仰向けになる遠坂。

メイド服のままで、スカートは乱れていて。襟口から除く首筋から上はほどよく蒸気し、まるで天井を明かりをまぶしがるように袖で目を隠した遠坂が居る。

なにか、自分が見ていること、していることが信じられない。

それに遠坂がこんなにか弱く、襲いかかられることを約束されているというか、もはやこれを恋にしないことがいけない罪であるかのように感じる、快感を求める俺。そんなことしちゃいけないとは理性は告げるけども、口の中に残った遠坂の塩辛さに甘さを感じるように、禁じられた快感はより狂おしく燃える。

遠坂は腕を退けると、どことなくぼーっとしたような瞳でいた。自分の身体に何が起こったのか、それに戸惑うかのように……そんな自失の態の遠坂が、なにか許されない陵辱の現場を目にしたように喉の奥に詰まる。

「う、士郎に舐められちゃった……イっちゃうだなんてもう……ん……」

「遠坂……大丈夫か？」

ああもう、尋ねたいのはそんな事じゃないのに、口は裏腹な言葉を出すばかり。

でも、手は身体に忠実だった。ベルトの留め金を外し、カチャリと音を立てる。ボタンを外す指がもどかしいが、それでもこれを脱がないといけない。

そうしないと、ズボンの中で漏らしてしまいそうなほど、俺の愛馬は猛り狂っている。

目が、柔弱な遠坂の姿を送り込み続けるのが辛い。この部屋の空気が俺と遠坂の匂いで満ちるのが辛い、聞こえるのが俺と遠坂の声なのが辛い、それに、この部屋に遠坂がいることが、それも一度快感を味わいさらに拓かれるのをまつ蕾のようにあるのが、この上もなく――

――

「……士郎……ぅ……ぁ……」

体を起こす遠坂が、俺の股間を見るとぱっと両手で顔を隠す。

そうしたら居なくなるわけでもないけども、そうせずに居られないんだろう。トランクスまで下ろし、俺は俺自身の男性を剥き出しにする。ぐっとへそまで反り返る、という慣例表現が強ちウソでないと思えるほどにそれは剛直、だった。

俺が扱いかねると思うほどに、それは熱い。

いつも思うけども、こんな熱いのを遠坂の中にねじ込むと火傷するんじゃないんだろうかって――

「し、士郎、そ、それ……」

指の間からちらちらと見る遠坂。なんど見てもその恥ずかしげな素振りは変わらない。

でも、髪を下ろして裸になる遠坂でもそれは愛しいのに、今は白黒のメイド服に身を包んでいて、そんな弱々しい素振りがどうしようもなく心に響く。心臓から股間まで直結のバイパスが合って、狂ったように血液の温度をそこで高めて循環させていくような。

「遠坂の味を知ったら、こんな風になった」

「な、なによもう、そんな恥ずかしいことを私に聞かせなくてもぉ……」

ぷっと頬をふくらませるけど、恥ずかしさを紛らわせているように聞こえる。

さて、これを――この遠坂にどうして貰いたいんだろう。宙に佇立する俺自身に尋ねたかったけど、それはただ遠坂を指して熱く脈打つばかり、で。

「ふぅ、ん……し、士郎？」

動悸を隠しきれないように、声が途切れる遠坂。

俺が遠坂に歩み寄る。遠坂は片手で口元を隠しながら、おどおどと手を伸ばす。熱い薬缶に手を伸ばすようにおそるおそる、そしてそれに直接手を触れると熱いと知っているかのように――

「……士郎、や、やっぱりその、これでしたい……んだよね」

つ、と棹に遠坂の手を付ける。指の細く冷たい感触が心地良い。
遠坂は手にした俺を何度か直視しようとして、そのたびに失敗して目を背ける忙しげな動きを止めなかった。俺の根っこを握っているのに、それを本当に手にしていると理解できないというか……
頼りないメイド服の遠坂を見ていると、いつも以上に虐めたく思う。
なんでか、よく分からないけども、今の遠坂はいつも以上に楽しめそうに感じているのは。
「……遠坂、その、ただじゃして上げない」
「えぅ~」
我ながら何を考えているのか、その衝動的な考えに呆然とする。でも、こうでも言ってみないと一晩中遠坂を抱き、中に注いでも満たされないという恐れが俺を駆り立てる。おかしかったけど、遠坂にそんな風にさわられると俺、は、
「……そういう格好の以上はやっぱり、士郎さま、この凛にお情けをください、って切なげにお願いしないと、だめ」
……だめだ、官能が脳を溶かしてもはや痴愚の領域だ。でも、こんな格好をして俺を誘ってくる遠坂の方に問題があるんだ、そういうことにしておかないと本当に、情事の後に水を掛けて覚ましても脳みそは蒸発して帰ってこないような予感がする。
「……」
目をまん丸にして驚く遠坂。もう二度もそういうことを言ったのだし、いい加減覚悟して欲しい、と思うんだけど……遠坂の視線が迷い、俺のを握ったままでどうしようかと思いに惑っているよう、だった。
口元を隠した遠坂が、ぼそぼそと囁くのが分かる。
「そ、そうよね、そうしないと……でも……ううん、士郎が……それなら……ん……」
人の今にも暴発しそうなシャフトを口にしながら悠長なことを、と思うけど急いては事をし損じる。尻の筋肉を締め、根本から血を送り込んで硬くさせ続けながら、遠坂の答えを待つ。
遠坂はようやく俺のモノを直視すると、目を閉じて……顔を近づけていく。
このままだと、遠坂は俺に。
「あ……」
「ん……」
遠坂の唇が、捲れ上がり腫れ上がった亀頭に触れる。
それは、それだけで遠坂の顔と唇にぶちまけてしまいそうなほどの、触れ合いで。息を飲む俺だったけども、遠坂の唇は離れる。
パンプスが脱がれ、遠坂はベッドに上がる。
ベッドの上になんとなく居心地が悪いようにぺたんと座っていたけど、俺をちらっと見ると、俺に向かって足を開いていく。
あー……あ、あ……そこまで、そんなことまで、あ、と頭の中がかき乱された。
遠坂は俺に向かって足を開く。まだそれも長いスカートに覆われているけども、すぐに手がその布地をまくり上げていく。再び露わになる遠坂の長い足と、腰。そして俺がさんざん舐め、彼女を絶頂に至らしめたその秘裂。
「士郎……ん。士郎さまぁ」
その気はないのかも知れないけど、遠坂の声は酔ったように甘かった。
俺の見ている前で、遠坂はお尻から手を伸ばして行く。その指が、遠坂の割れ目の縁を撫でている。
足は大きく開かれ、スカートは上げられ、遠坂の恥ずかしい場所と指の動きに遮るものがない。紅く羞恥に染まって俯きながら、遠坂は――
指が、くに、と襞をくつろげる。
その中の粘った泉がとろりとこぼれ落ちる――
「士郎さま、この凛に……お情けをくださいませ……その硬く逞しいおちんちんで……」
あー、あ、ああ。

遠坂が俺を誘っている。遠坂の濡れた女性の泉が俺においでおいでと差し招いている。あそこの中は濡れていて熱く俺を締め付けるから、それにおれがのしかかられることを望んでいる。長いガーターベルトと白い肌、それに着乱れたメイド服と恥じらいに染まる遠坂の姿は、これ以上もなく衛宮士郎という存在を破壊しに掛かっていて――

望んだことだとはいえ、いざ目の前に提示されるとそれは罪の薫りもする。

手に取る事は許されない。だが手放す罪に比べれば取るに足りない。

彼女も望んでいて、俺も望んでいるのだから。頭の中がねじれ、それは手足を、そして己の欲望の器官を振るわないと矛盾にちぎれる――

唾を飲むが、カラカラに干上がってカクリ、と機械みたいな音がする。

足下に絡まったズボンとトランクスを蹴り捨てると、俺は、俺は――

「遠坂っ！」

時間がぶつ切りになる。駒の飛んだフィルムのようにいくつものシーンが飛ぶが、それなのにそれはすごい速度を持っていた。遠坂の身体を押し倒すのと、足の間に身体を差し込むのと、首筋にキスをするの、そして遠坂の身体をベッドに下敷きにして、もうなにか拒絶反応を起こす別の身体の器官がくっついてるような腰を遠坂に押しつけて――

ぬむり、と遠坂の中に俺が侵入すると、意識が連続する。

遠坂のしなう身体を抱きしめ、首筋に縋りながら俺は遠坂と繋がっていた。思ったより身体の奥にあるのでいつもちょっと戸惑うんだけど、今ばかりはまるで鞘に刀を戻すように訳無く遠坂に入っていた。

ず、ずずず、と遠坂の中に進んでいく・

「あああっ！士郎ぅ……」

「はぁつ、あ、遠坂……いい……」

きつい遠坂の媚肉が、俺を締め付ける。

造りの小さい遠坂の膣口を俺のペニスが押し広げているのが分かる。いつもする度に痛そうで申し訳ないのだけど、今ばっかりはそんなこと露ほどにも思わない。

それに、布地のボリュームのあるこのメイド服の遠坂を押し倒す、感触。

下半身は剥き出しで繋がっているのに、上半身はきっちりとガードされている。それがひどくおれの官能を刺激していた。

腕をたて、身体の下の遠坂を見つめる。

遠坂は体の中から押し広げられる苦痛に耐えているようだった。こんな荒々しいされかたをされると辛いんだろう。だから、それも感じなくなるほどに遠坂を上り詰めさせないといけない。はっ、はっ、と浅い息を吐く遠坂。

「いくぞ――いいか？」

「うん、士郎……んんっ―！」

遠坂の差し伸べる腕が、俺の首に回る。

それを合図にして、遠坂の腰を突く。めりっと何かが歪むような感じすら覚える、熱く小さな遠坂の中。指を入れると一本でもぎちぎちなのに、こんな硬くて太い俺が入っているのが不思議なほどに――

ぎゅーっと首の後ろの辺りを掴まれるのが分かる。

ずっず、と遠坂の中を引き、そして進む。身体の下で布地の多いスカートとペチコートが挟まって気ぜわしい衣擦れの音になる。そして、遠坂の首が反り、タイと襟からすらっと伸びた首筋があまりにも美味しそうに反る。

「ああっ、ん、はぁっ、あっあっあっ……あ……はぁ……」

とんとんとんとん、とリズムを刻む。遠坂の抵抗が大きいから、必ずしも思った通りのリズムで進める訳でもない。でも、遠坂の中にある俺自身はあまりにも負担が大きく、まるで張りつめた水風船のようにぷつんと弾けそうで、それを遠坂の肉が締め付けて押さえている、みたいな――

でも、頭の中はもう融けていた。

遠坂の顔に、息に俺の薫りを染みつけさせている。そう思うと堪らなくなる。遠坂を突くたびに身体が揺れ、声が挙がる。それがなんとも、そそるというか――

「はっ、ああっ、し、士郎……ああ、はぁ、ああ……あっあっ……」

「うっ、は、はぁっ、あうっ……う……」

腰を振る。それをただ無我夢中で。ただ振るだけなら作業じみて忌み飽きるけども、その一突き一突きに新しい感覚と感情がある。俺は遠坂という身体と犯しながら、俺の心は遠坂のいう女に侵されていた。

遠坂にどうするか、それだけしか考えられない。彼女の鼓動を感じ、唇を交わしてその柔らかさを味わい、手を伸ばし服後しにささやかな胸を揉み、そして汗と香水と樟脳の混じった薫りの中でただ遠坂をひたすらに、男根の先が遠坂の奥の門に当たるほどに——

「あっ、士郎、深い……そんなにしたら、私っ、いい……はっ、ああ……あ……」

遠坂の膣を突く、というよりも内臓を掻き回すことを俺は考えている。

手を太股に回し、足を持ち上げて遠坂の身体を屈曲させる。それはさらに深く彼女の身体を貫くために、体重を掛けて奥に奥にと……

「ううっ、ああ、ああ……いいよ、遠坂の奥が熱い……」

「いっ、あ……士郎……はぁ、あ……ああっ！ああん！」

手に触るストッキングの目が、イヤに細かく感じる。

遠坂の胸に当てた俺の額は、遠坂の体の中まで探れるような気がする。

そんな、興奮が極まって感覚が敏感になり、気にならなかった変なことまで頭の中で急激に巡り出す。寝室の空気の流れ、壁の遠さ、ベッドの軋み、シーツの皺、遠坂の息の甘さ、鼓動、身体の細さ、そしてこんなに彼女が俺に快感を与え、俺は彼女を上り詰めさせているのに、俺の身体は遠坂の奥で融けてしまいそうな——

きゅーっと睾丸が上がり、遠坂の陰門を叩く。

遠坂の身体にのしかかりながら、俺はただ必死にその性の営みを激しく行っていた。遠坂が俺の頭をつかんでぐしゃぐしゃにするのも全然気にならないし、爪が立ったりしてもそのひりひりとした痛みすらむずがゆいような快感で。

いや、遠坂にこのまま、耳から指を入れて俺の脳みそをその指で犯して貫いたい。

そんな妄想が俺を支配するほどに、どうにかなっていた。いや、そんなことは蛇足だ、もうこんなに俺は遠坂にイカれているのにこれ以上どうして、どうなって、何がどう——

「あんっ、ああっ、ああっ、ああああっあっうっあっあああ」

遠坂のよがり声のピッチが短くなる。

それは俺のリズムと同調し始めている。二人で踊るカドリルの様に、交わす足とリズムが揃い限りない興奮が手を伝ってくるような、周囲の世界が俺たちを祝福して白い世界に連れて行ってくれる、そんな、幸福感。

駄目になる。身体が融け、ほら、俺の先っぽが弾けて——

「ああんっ、あっ、ああああー！」

「遠坂——はぁーっあう、ああ……ああ！」

ぐっと遠坂が俺に抱きつく。二人の身体が接する。

遠坂の身体をベッドに押しつけ、沸き上がり解け乱れ散るそれを感じていた。遠坂の反る体と抱きしめる俺の身体の反りが合い、細い身体に俺を全て預けるように、して。

どくどくと溢れる精を遠坂の中に、放出する。

爆発的な射精というよりも、なにか限りなく高まった潮に堤防が決壊するようにどくりどくりと絶え間なく溢れるような、そんな——射精の快感があった。

遠坂の絶え絶えな息が、愉悦の声を混じらせる。

「あああー……中に、中に士郎が……一杯……そんなにされたら私……う、はぁ……」

何度か腰が絞り、遠坂の膣を一杯に満たし、逆流するほどに。

でもどうしたのか、まだまだ出来る気がする。いや、こうやって抱きしめている遠坂の身体が、髪が、薫りがまだ俺を駆り立てる。

射精して痛さと一種の鈍感さを染みつかせるペニスだが、まだ、働き足りない。

だって、まだ俺は遠坂を——

「士郎……え？きゃっ！」

遠坂の驚く声がする。それはそうだ。

だって俺が抜かないままに動き始めたんだから。どうして動けるのか不思議だったけども、止まってしまうと二度と満たされないと信じるように、ぐちゅりぐちゅりとかき混ぜる音を立てながら……

「し、士郎！？そんな私もちょっといっちゃったのにそんな——ああっあっあああ！」

遠坂の甘い悲鳴が聞こえる。動かすとまだ男根に硬さが残っていて、動かせば再び硬さを帯びてくる。いや、俺の精で潤滑された遠坂の膣道はえもいわれぬバランスで俺を刺激してくる。ぬるぬると動く腰が、まるで遠坂を求める魔物のように感じる。

抜かずに二発、というのだろう、これは。

そんな精力がどこにあるのか――でも、今の遠坂なら軽いものだ。

「遠坂……まだまだいくぞ、はっはぁ、あ……」

「ひっ、うっ、あっ、ああ、ああうっ！」

遠坂がぽかぽかと胸を叩く。でも、遠坂の顔を見ると、快感と疲労が何とも言えない調和を成している。口づけすると体を起こし、そして――

こんなことできるかどうか、自信はないけど今ならやれる、と。

「後ろから行くぞ、遠坂」

「そんな――ひっ、あああ！」

体を起こす、でも遠坂と繋がったままで体位を変えようとする。

繋がった俺と遠坂の部分を軸にして足を持ち上げ、遠坂の身体をひっくり返す。こんな離れ業が出来るとも思ってなかったけど、くるっと身体が入れ替わる。

遠坂の背中が見える。それは黒いメイド服に白いエプロンの背紐と腰紐が模様を描き、遠坂の髪も散らばっている。後ろからメイド服姿の遠坂を犯している、それはまたどうしようもなく俺を高ぶらせる。

まだまだ、湧くような力がある。遠坂の腰に手を回すと、そのまま――

「ひっ、あっ、あっ、ああうあうあっ！」

「遠坂、遠坂――うっ、うっうっ」

後背位で遠坂を貫く。抱き合う正常位より深く大きく遠坂の中を漁る。

遠坂の中からごぽり、と俺の精液が溢れるのが分かる。それをぐちゃぐちゃに掻き回し、さらに滑らせていく俺。遠坂の首が何度も動き、腰の波動に身体が揺れる。

「あっ、あっ、あっ、あああ……」

声が甘く歪む。喘ぎ声が荒い呼吸の中に埋もれる。

前にしたときがダンスだとすれば、これはもっと荒々しい原始の舞踏の様だった。俺も遠坂もどこかで鳴るバスドラムの響きに突き動かされるように、激しくお互いの身体を貪る。貫かれ犯されているだけにみえる遠坂も、その肉の道は限りなく貪欲に俺を奪い尽くそうと締め付けてくる。それに、遠坂の姿がもはや俺を虜にし、まるで壊れたセックスマシーンのように激しく、強く、そして狂おしく駆り立てた。

こんなに、こんなに遠坂との交わりが……

「ひっ、あっ、ああっ、うあ！」

「いいのぉ、いい、士郎……もっと、もっと私を……ああっ、あはぁ、あああー」

何を言って何を聞いて何をして何をされるのか。

分かる必要も、分かる時間もなく、遠坂と俺がまるで獣のように、繋がり求め合って――

「士郎……しろぉ……ああああっ！」

「とぉ、さか、ああああ……うぁああっ！」

また、どくっと溢れる。

短いようだけど、一晩中遠坂にはまっていたような気もするけども、それも不思議に感じるほどに体は熱く、噴き出す精の勢いがあって――怖くなるほどに。

遠坂の身体を背中から抱きしめ、荒い息を、激しい鼓動にただ震える。

俺と遠坂は、ベッドに重なり合った格好で、しばしの時間を……

「はぁ、はぁ、あ、ああ……まだ？もっと、する？士郎」

「……もちろん、遠坂……」

§　§

トーストは六枚切りでマーマレードとイチゴジャムは遠坂指定のティプトリー、それにバターにクリームも用意する。

卵はどっちにするかと思ったけど、スクランブルエッグにした。バターでふんわり柔らかく

出来たのでちょっと満足でもある。生すぎず火が通りすぎず、ほどよく柔らかくできている。
さらにソーセージとベーコン、サラダはレタスとほうれん草、一番分からないのがこの白豆の煮物というやつだが、まぁ、あまり深く考えないようにしよう。

紅茶はイングリッシュブレックファースト、ポットを覗くと真っ黒で出過ぎじゃないのかと不安になるけどもともとこういう色なので仕方ない、らしい。朝からちょっと気合いを入れて朝食を作っていたのではあるが――

「……シロウ、おはようございます」

居間に入ってきた、聞くと居住まいが自然と正されるような凛とした声。セイバーの声だった。盛りつけの終わった皿を持って入ると、くんくんと彼女は薫りを嗅いで嬉しそうに目を閉じる。

「……良い薫りがします、パンの香ばしい薫りと油がほどよく焼けた肉の薫り、それに紅茶もありますね、シロウ」
「ああ、まぁちょっと気合いを入れてみた……んだけど」

イングリッシュブレックファーストというものであるが、なんとなく嬉しそうなセイバーに故国の料理の名前を口にするのは憚られる。というか、彼女には故郷の料理にどうにも恨み辛みばかりが残っているようだったから。

まるで待ちこがれた餌をまえにして尻尾を振る、もこもこの子犬のように嬉しそうなセイバーであった。いつもは鋼と花でできた清冽な女剣士というたたずまいだったけども、食事の時はそうも感じない。俺は台所から運んできた皿とカップとグラスを並べていく。

四人分。俺とセイバーと、まだ来てない藤ねぇと遠坂の分。
……そう、遠坂の分があるのがミソで、遠坂が居なかったらこういう立派な朝食にならなかった、とも言える。なにしろ昨日は遠坂と……

「……」

思い出すと耳まで真っ赤になるようで慌てて顔をこする。台所に立って紅茶のタイマーを見つめ、セイバーに見られないように背中を向ける。だって、昨日の夜は遠坂と都合三回も……

いや、いかん。朝っぱらから何を考えている、俺。
でも脳裏に混じるのは、俺の目の前に乱されて精の白い飛沫を浴び、ぐったりとしている遠坂のメイド服の姿で――うぅ、朝に水垢離までしてそんな妄念を払おうとしたのに俺は……

「鳴ってますが？シロウ？」
「え？ああ、うん」

ぴーぴーぴーぴーというブザーも聞こえていなかったみたいで、セイバーに言われて初めて気が付くていたらく。ぶるぶるっと頭を振ると、茶こしとポットを持って居間に向かう。
セイバーはすでに食卓に着き、今か今かと待ち構えていたけど俺を見ると、僅かに眉を顰める。俺が変な顔をしているのか、それとも……

とくとくと朝から心拍が上がる。ああもう、なんなんだか……

「シロウ……聞いてもよろしいですか？」
「うんうん、あ、カップ回して、藤ねえのは後で来てからで良いから」

三人分のカップを集めると茶こしを回して濃い紅茶を注いでいく。俺は頷き、来て当然のセイバーの問いを待った。いや、聞かないでくれる方がどれだけか有り難かったのだけど、そうもいかない。昨日最後に見た、セイバーのあの信じられない顔はちゃんと覚えている。

「昨日の凛は、いったい何だったのですか」

……来たか。

いや、いったい何だったんだろうな、と言うのが俺の正直なところだった。原因は分からなくもない、だけど現実が飛躍に飛躍を重ねていて、気が付くとなにかこう、取り返しが突かないほどに大変なことになっていた。そして、その素晴らしくも目眩を覚える飛躍を遂げたのは俺ではなく、この朝っぱらから死にそうな顔をしている遠坂凛で……

「お、は、よ、う、……う、う、う……」

……朝の調子が上がらない、低血圧生物だとは知ってはいるが、今日の遠坂はそれに輪が掛かっていた。制服姿で居間に入ってきた遠坂は立って歩いているのが不思議な塩梅で、土

27

気色ですらある顔でふらーっと台所に向けて進んでいく。
「ああおい、遠坂、朝飯あるのにそっち行くなって」
「うう……牛乳……」
「それもこっちにある、だから落ち着き無くふらつくな、と」
声を掛けるとなんとかこっちに進路が変わる。そして俺の向かいにすたん、となにか実体がない様子で座る。目の下に隈が浮いている気がするけども……こう、もしかして女性の周期と重なってるのか?と不安になる。
……いや、そりゃないな。昨日の昨日がああだったわけだし――――
「おはようございます、凛。こちらをどうぞ」
「すまないわね、セイバー……ん……」
セイバーが牛乳を差し出しているようだったけども、その姿が見られない。
だって、遠坂と白い液体と唇という組み合わせはいやがおうにも昨日の痴態を思い出してしまう。悪いコトじゃないんだけど、それはセイバーの居る食卓で耽る妄想にはあまりにも……
とりあえずカップを取り、口に運ぶ。なんかめちゃくちゃ苦いな、煎じ薬みたいだしこれ。
「うわ、いつもやっぱりなんだと思ってたけど、流石にモーニングブレンドをストレートで飲むのは趣味悪いと思うわよ、士郎」
「凛にも伺いたいのですが、昨日の凛のあの服は一体何だったのですか?」
……というか、セイバーが直に凛に聞いてるし、って――――っ!
「せ、せ、セイバーそれはなんだ、その!」
「凛があの服を着替えていたときも何かおかしかったのですが、それにも輪を掛けておかしかったのはあなたです、シロウ」
勢い込んだ俺にぴしっとカウンターで当たる、セイバーの指摘。
いつもの冷静きわまりないセイバーの素振りが恨めしくもある。聞かない限り一歩も引きません、という不退転の決意を見るようで、そうなると全部言わないと許してくれないみたいで……
目をしばたたかせ、遠坂を見る。コップ一杯の牛乳を飲み干し、さっきまで調子悪そうだったのがウソみたいにけろっとしている。魔術回路以上のスイッチがこいつの中に入ってるんじゃないかと常々……
「凛の姿を見るなりまるで夢遊病者のようになったシロウをどんなに心配していたか、わかっているのですか?私の前であんな風に生返事ばかりで食事をされるといったいどんな魔術に絡み取られたのかと不安で仕方なかったのですよ」
「……面目ない。で、そのままだとお茶が冷めるし、みんな揃ったし頂きますということで」
手を合わせていただきます、と唱える。議論から逃げていると思われるだろうけども……実際あれをどーやってセイバーに説明しろっていうのか、それが無駄というか無茶というか。
流石に香ばしく焼ける肉と脂の薫りを前にして、それを横に放って俺を問いつめるつもりはセイバーにも無いようだった。渋々ではあるがトーストにバターを塗るセイバーだったけども、目は俺をじろーっと眺めてくる。
「それにしても朝から豪勢ねぇ、これなら桜か藤村先生がいた方が良いかもってくらい」
「……昨日の夜がいろいろあったから、朝食をちゃんと取らないと駄目だろ、うん」
そのまま囓る俺と、マーマレードを手にしてその台詞を驚いたように聞く遠坂の顔。昨日の夜というのはまぁ、取りも直さず――あれだけやって朝食もいつもの遠坂のようにほとんど取らないと、いろいろ心配になるから。
……と、俺にしてはひどく気を遣っていたわけだった。
かーっと遠坂の頬が紅くなる。
だが、スプーンでそんな感情の虚を突かれた怒りを込めるかのようにばしばしがりがりとトーストをひしゃげながら、遠坂はひくひくっ、と口元を引きつらせた。
昨日の夜とは何ですか――と、相変わらず刺さるセイバーの質問の眼差し。
「ふふふーん、士郎も昨日のあれはよほど気に入っているのねぇ」
「……」
気に入ってないと言えばウソになるが、気に入っているというと一体どんなお小言をセイバーに喰うのか分からないし、なんと遠坂の思われるのか……だーっ、だって昨日誘ったのはお前じゃないかー、お前があんな事をしなければ俺は……

28

「……昨晩、ですか？私が詮索すべきではないのですが、土蔵にも寝室にも居なかったですね、シロウは。いえ、これは私には全く無関係ですけども――いえ、いえ」

かっつかっつとセイバーが腹を立てたようにフォークで皿の上を浚っている。見ていて気持ちよくなる健啖家ぶりだったけども、なにか俺の食事を俺代わりに八つ当たりされているようでもあって、う、と声も出ない。

「そうねー、今日も朝から士郎の虚を突いて早起きして朝食を用意して、あの格好で『おはようございます士郎さまぁ』ってやろうかと思ったんだけどねー」

……やめてください遠坂さま、そんなことされると朝から持ちません。

俺の理性が、というか体力というか、どっちかというと腎力が。

「あの格好は凛、使用人の服装だと思うのですが、魔術師でありマスターでもあるあなたが何故着ていたのですか？それが私には解せません」

「……あれはな、それはな、あ」

「あれ？私の家のクローゼットに父さんの時代から仕舞い込まれてた骨董品よ？魔力はないけどもちょっと士郎が驚くかなー、と思って」

ちょっとどころじゃない。驚いたさ、ああ、心臓止まって脳みそがどっかこぼれ落ちるほどにな。

ただ何を遠坂がこのまま言い出すかが不安で、それを紛らわせる為に俺も手早くベーコンと白豆を口に放り込む。俺とセイバーだけ気ぜわしく、トーストを噛る遠坂だけ妙に余裕がある。

「私も驚きました。ですがあの服を見せて頂いたときに、てっきり私に着ろというのかと――」

がつん！とフォークが皿にぶつかり合って音を立てる。いかん、修行の成果もなくこんなに感情が表れやすくなっているのは俺は駄目になっている。それは秘密にしておきたかった核心に図らずもセイバーが接触したのだから。

朝からもう、なんて心臓に悪い会話ばっかり……

目線で遠坂を伺い、お願いだからセイバーを刺激してくれるな、とアイコンタクトを試みる。だが目を細めた遠坂は、鼻で軽く笑っただけだった。

……あ、あの、昨日抜かずに三発で疲労困憊させて事を恨んでる？

「……あらセイバー、あれ着たかったの？」

「……」

固唾呑んで、セイバーの反応を待つ。

いきなり忙しなく飯を食っていたかと思うといきなり停止する俺は如何にも怪しすぎる。でも、冷静に考えるとこのメンツと昨日の出来事の中で一番怪しいのは俺であり……

セイバーは口にフォークをくわえたまま、ふむ、と頷く。凛然としたその横顔なのに、今彼女の頭の中にあるのがメイド服のことだと思うと目眩がするというか……二三度瞬きし、長い睫が動くのを見つめている。

だが、セイバーは何かを諦めたように首を振る。

「……いえ、ああいう布地が多く装飾があって女性らしい服が私に合うとは思えません」

「そ、そんなこと無いと思う……けど」

「んー、確かにセイバーはスッキリした方が好みみたいよね、今の服みたいに。ふむ」

遠坂はセイバーの発言に思い当たる節があったかのように頷き、トーストを口にしていた。俺はようやく止めていた息をゆるりと履き、平常を装って食事を再開する。

でも、似合わない……のか、セイバーが。それはなんというか……

「……惜しいなぁ」

「惜しい、ですか。シロウは私があのお仕着せを着るのが見たかったのですか？」

「ふふふ、ダメダメ。セイバーにあんな可愛い格好させちゃったら士郎はもう大変なことになるんだから。教えて上げよっか？士郎ったら昨日私のあの姿に――」

って、一難去ってまた一難かよ……

にたにた笑う遠坂。腹の底できっとあんなこんなハズカシ事を口にして俺とセイバーを同時にもだえさせようと言う魂胆か、このあくまめー！あれすら武器になるとは！

セイバーが背筋を伸ばし、遠坂を不思議そうな瞳で見つめる。この話に本当に進んで良いのかを判断しかねて困っているように。

「言うなっ、遠坂言うなー！」
「……それはシロウと凛のプライバシーに秘密に関わるので、私は知らない方が」
「いえ、きっと士郎は私に味を占めてセイバーにもあんな事やこんな事をしようとするかも知れないから、やっぱりマスターとしては予め注意しておくべきだと」
「冤罪っ、冤罪ー！」
「…………そういわれると多少なりとも気にはなるのですが」
「いや、もうあの服も洗濯するの大変よ？着たままで士郎ったらあんなにもー」

ぬ、ぬ、ぬぁぁぁぁぁあああああああああああ！

ぽふん、とセイバーも赤面して――
なんて事言うんだよ、そんなこと実物を見たセイバーはともかく藤ねえに聞かれたら俺はー！

「な、な、何をそんな朝から破廉恥な事を言うのですか凛！　それに士郎も何をやっていたのですか！　答えて貰います！」
「ふふふふー、ま、私から聞くよりさんざんお楽しみだった士郎の方が事細かに語れるわよねー、もう、士郎ったらあんな事フやェチなことを私に言わせるとか……思いも寄らなかったわ。師に見えないところで弟子は成長して居るものね」
「だだだだ、だぁぁぁ！　そ、それは食事の席では相応しい話題じゃないだろ遠坂！　それに登校時間もあるんだからさっさと静かに食事するぅぅぅ！」
「士郎ー、おねーさんに秘密で何話してるのかなー？　ちょっとお姉さん、遠坂さんと士郎に何があったかセイバーちゃんと同じくらい知りたいなー」
「わっ、湧くな藤ねえ！ぬぉぉぉぉぉおおおおおー！」

《ｆｉｎ》

30

二人共に

阿羅本　景
イラスト　火星田レイ子

「……」

布団の中に身体を横たえていた彼女は、眠りの中から意識を取り戻す。
長い睫の瞼は落ちたままた。純和風の布団と枕に似つかわしくないほどの、金髪碧眼の美少女であった。瞼を開け、そして何故自分が目を覚ましたのかの原因を探る。

アルトリア――という真名ではなくセイバーというクラスで呼ばれる彼女は、その気になれば一日中寝ていることも可能であった。を取って魔力の消耗を防がねばならない、という理由もあったが――そんな彼女を目覚め特に英霊という高い霊格でありながら使い魔としてこの世界に留まる為に、出来るだけ休養させた何か、がある。

時は深夜、日が変わる頃であろうか。
部屋の中は窓から薄く月明かりが差し込むだけの暗さだが、すぐに時間の見当が付く。このような深夜に目を覚ますというのは何かがあるものか。

「……」

セイバーは布団の中で身動き一つしない。自分の気配を殺し、何が起こっているのかと辺りを探る。この寝室の横は衛宮士郎の居室で、彼はここで眠っている筈、だった。
もっとも士郎が夜半居室を抜け出し、庭の土蔵に籠もっていることも多い。その場合に起こしに行くのは彼女、セイバーの役割であったが。

「……――――」

士郎は居るようであった。夜半にどこかに出掛けてしまい、セイバーの手を煩わせることがないので安堵した、が、それ以外に無視しがたい存在がある。

「……――……」

それを誰であるのかを推測するのは容易だった。何しろ自分に魔力を供給する主従のパスを持つ魔術師だ、たとえ闇夜に目と鼻を摘まれ耳を塞がれたとしても、どこにいるのかを指さすのは訳もない。
遠坂凛。彼女も隣室に居ることは明らかだった。

セイバーは目を開き、天井を見つめる。寝覚めの悪さが彼女にあるはずもない。
音を立てずに身を起こすと、掛け布団を払い上げる。寝床の中では何一つ纏わない彼女は枕元のブラウスに手を伸ばす。

「……」

起きるからにはきちんと普段の服に着替えるべきか。
隣室に凛と士郎が居るというのが気がかりで、こんな時刻にいる以上は自分に何か用があるのかも知れない。もしそれが気の回しすぎだとしても備えあれば憂い無し。真夜中にちゃんと着替えたのが無用に終わっても、もう一度脱いで眠れば良いだけのこと。

そう考えると、セイバーの身支度は早かった。
音も立てずインナーを身につけ、ストッキングを履く。ブラウスのボタンを留め、ストリングタイまで綺麗に巻く。暗闇の中でも目は冴え渡り、奥の違棚の上にある置物の模様まで見渡すことが出来る。
そして、襖の向こうから囁き声をセイバーはいていた。

「……遠坂……だから……それは……」
「セイバー……もう……遅い……」

それは切れ切れに聞こえる、押し殺した小さな言葉だった。
スカートを上げ、背中のサッシュの紐を寄せる。着替えをしているというのにセイバーはほとんど物音を立てていなかった。自分が立てる音を最小限にして、今部屋の向こうから聞こえる音を最大限に聞き取ろうとしているかのように。

31

髪をいつものシニョンに結いながら、セイバーは考えた
声の主は間違いなく衛宮士郎と遠坂凛。二人が一緒に士郎の寝室にいることは珍しい。それもこんな夜分になにを話し合っているのか――セイバーはぴたり、と動きを止めて耳を凝らす。今や彼女はすっかり目覚め、身支度を整え終えて畳の上に正座している。

「セイバー――そんな……だから……おい……」
「だって……セイバー……ねぇ、士郎?」
「ばば、馬鹿……っ……セイバーも……お前……」

耳に入る二人の会話の残滓にはやたらと自分の名前が呼ばれているようにセイバーは観じていた。だが、話の具体的な内容を示す語句を聞き取ることが出来ない。こうして聞き耳を立てることは無礼であるとセイバーは知っていても、しばし身じろぎ一つせずに音だけで襖の向こうを察しようとする。

ごそごそ、と衣擦れの音がする。
それは布団の上をにじりよる音だとセイバーには分かった。当然この時間の士郎の部屋だから布団があるのはおかしくない。だが、どちらが何をしているのか――セイバーには断定できない。

「もう……ふふ……セイバーに……」
「なっ、遠坂……そんなこと……それよりもお前が……」
「あら?でも……ん……」

ごそごそと音がする。一体何をシロウと凛はしているのだろうか?
セイバーは迷っていた、今ここで顔を出すべきなのか。何とはなしに自分は襖の向こうで必要とされていない気がしていた、が、こうも続けて名前を呼ばれると強ち自分に無関係であるという気もしない。
襖に手を掛けて、セイバーは微かな躊躇いを感じている。
だが、次の瞬間にセイバーの耳が、聡くその声を聞きつけていた。

「ああっ――!」

危うさを感じさせる士郎の声が上がった。
それを耳にするとセイバーは矢も盾も堪らずに――

「どうしましたシロウ――――う……」

すぱーん!

と勢いよく障子を開け、そのままセイバーはマスターの名前を口にする。
だが、自分が見てしまった光景を前にセイバーは襖に掛けた手を外すのも忘れていた。士郎の部屋から向いた視線に、セイバーの視線は見事に合ってしまって――

「うぉ……」

それはまるで、異世界から出て来た奇っ怪な存在を目の当たりにしたかのような士郎の、驚愕の瞳であった。布団の上に座り込み、上体を僅かに後ろに傾けている。
そして、もう一人のマスターの姿をセイバーは探す。士郎に対面して座っている筈の凛の姿がない。いや、いることはいるのであるがその格好がが一瞬理解できない。
凛は確かに士郎の前にいたが、なぜか四つん這いの低い姿勢で士郎の足に被さっている。丁度顔が士郎の腰の辺りに当たるように屈み、片手で何かを摘んでいる。
もしここで暗闇に紛れて凛の手が握っている物が分からなければセイバーにとっても、士郎や凛にとっても幸福だったのかもしれない。だが畳の目まで見通すセイバーの視力が仇を為した。

「セイバー……あ……」

畳の音に驚いた凛も、手に握った物を隠す暇もなかった。髪を下ろした寝巻き姿の凛。顔を上げた彼女はセイバーがきちんと正装し、畳の上に正座しながらぴくりとも動けず、また自分も士郎の腰に被さる格好を解くことが出来ないことを知る。
彼女はセイバーから咄嗟に目を離すが、離しても目を向ける先は自然とそこになる。
そして、凛の細い指に握られた、剥き出しの――士郎の男性器。

セイバーの、凛の、そして持ち主である士郎の三者の視線がそこに集中する。
三人の瞳の先にある、グロテスクでありながらある種の愛嬌のある形状の男性器官。それは内側に興奮を燃料に血液をくみ上げ硬くなっていたが、今まさにこの寝室の注目の的となると……

32

ふしゅん、と意気消沈して哀れにも縮んでいく。
それをまじまじと見つめながら、セイバーは今まさに凛と士郎が何を行おうとしていたのかを余すところ無く理解できた。いや、理解できたからこそセイバーの意識の中が干上がりそうなほど加熱され、その熱が一気にセイバーの顔を朱に染める。

「失礼しましたシロウっ！」
「おわぁぁぁぁぁぁ！せ、セイバー、マテこれにはいろいろと」
「せ、セイバーそんな逃げなくてもっ」

開いたときと同じように、勢いよくすぱーんと襖がスライドしてセイバーの前を塞ごうとする。士郎は自分の股間を押さえて転げ、凛はまるでタックルするように襖に向かって低い姿勢で飛びこんでいった。

「凛、すいません私が夜分遅くに目を覚ましたためにお二人の睦み合いを邪魔してしまいましたっ、この罪万死に値します！」
「そんな責任あなたに無いわよ、だからセイバー大人しく話を聞きなさい！」
「遠坂っ、見られたっ、お前がこんな無茶するからセイバーにーっ！」
「ええいアンタは静かにしなさい士郎！だからセイバー、落ち着いて！」

襖を閉め切って自分の部屋に逃げ込もうとするセイバーと、その襖をこじ開けて中からセイバーを引きずり出そうとする凛。二人が襖を挟んでギリギリと力を掛け合う横で、尻丸出しでまるで股間を蹴られたように呻く士郎の切なげな声が響く。

「うう……おおおお……」
「こうなったら令呪を使ってでも……」
「こ、こんなことに無駄に令呪を使わないでください、凛！」

脅しのように口にした凛にはっとセイバーが声を上げる。
だが、その僅かな隙を凛は見逃さなかった。

襖を横に引くのではなく、桟も割れろと両手で思い切り引っ張る。凛らしくもある果敢で無茶で向こう見ずで、それでなにより予想外の一手。

「――！」

ばくん！と襖ごとセイバーが引っ張り出される。自らの上に被さってきた襖を受け止めて後ろに傾く。そのままたたらを踏んで後ろに倒れない様にバランスを取る凛と――前のめりに崩れた体勢を支えようとするセイバー。
だが、手を突こうとするその先には剥き出しの士郎の臀部が――

「シロウ！」
「うわっ！」

運悪く、自分の横を襖に襲いかかられる様に退く凛を身を捩って逃げた士郎。一秒の数分の一の間の目まぐるしいやり取り。セイバーにとってはそれでも己の状況と周囲の状況を把握し理解し最善の一手を講じることは訳もないのである、が。

ぺたり。

セイバーの手になにやら柔らかくなま暖かい物が触れる。手を突こうとした士郎の身体が反転し、その先には剥き出しの股間に――そもそも士郎の引き締まった筋肉質の臀部に触れることを覚悟していたセイバーにはその感触の差はあまりにも……
セイバーが目を見開き、自分がどこに手を触れているのかを理解しようとする。
そして、目の前の士郎がそれを触られたときの表情が瞼に焼き付く。口と目を開け、鼻の穴まで開いてそこからだらだらと焦りに満ちた魂がこぼれ落ちてきそうになる、そんな間が抜けて深刻な表情――

そして、セイバーは真上から、哀れな士郎の縮んだ男性器を握りしめてしまい――

「し、シロウ！これは一体なんですか！」
「決まってるだろう俺のちんこだっ、だからそんな握りしめるなセイバーぁぁ」
「なっ、なんで私がシロウの男性器を触れているのですか！」

動転して理解不明の言動を繰り広げるセイバー。そりゃセイバーが倒れてきたからでしょう、という回答を士郎は口に出来ないほどに――それでもセイバーの冷たい手が自分の男性器を掴んでいる、くすぐったいようでそれでいて背筋をぞわぞわっと這い上がる異質な快感。
そのままそれをずっと続けて欲しいような、それは……

33

「っとぉ！」

傍らでブリッジしそうな格好で支えていた凛が、ようやく襖を捨ててバランスを取り戻していた。がたん、と投げられた襖が壁に当たる音が二人の意識を引く前に――凛は膝を折って布団の上に座り込む。

そのまま凛は、流れるような動きでセイバーに抱きついた。戦闘の達人であり体術でも人後に劣ることはないと自負するセイバーであっても、予想外の動きを繰り返し、さらに今は士郎の股間を触っている状況では逃げようがない。

「ふぅ、やっと捕まえた、セイバー」

「な……凛、一体何を……」

後ろから抱きつき、腕に外から抱き込む凛。腕の輪で囲い込まれたセイバーは身動ぎして逃れようとする。いや、凛の腕力があったとしても軽く腕を上げるだけで弾き飛ばすことは訳のないことであった。

だが、凛も己の非力を分からない訳はない。そのための先手の一手を打ち続ける。

凛がしたのは――

「ひ……ぅ……」

ぺろん、と凛はセイバーの耳朶を舐める。複雑な耳の窪みに凛の舌が伝った。

耳が敏感なのか、セイバーは軽く身じろぎする。耳を舐められ慣れている人間は滅多にいないので、湿った舌が這えばその異な感触で力が抜ける。それがサーバントであっても奥手なセイバーであれば尚更……

凛は間近の耳にひそりと囁く。

「ねぇ……あなた、士郎のモノに触れてるわね」

「あ……凛……これには事情が……」

後ろから体重を掛け、身体を士郎の上に倒れ込ませる凛。セイバーはその指摘で驚いたように士郎から手を離そうとするが……たとえ握るのを止めても手は触れたままであった。むしろ凛のせいで士郎に身体を密着させられている。

「なぜ……このようなことをするのですか、凛」

「そ、そうだぞ遠坂、ちょっとセイバーに触られて気持ちよかったと思わなくもなかったけども、それはその」

足を開いてセイバーを受け止めるような格好になっている士郎が動揺も露わに口にする。セイバーの肩越しにうるさい黙れ、という一瞥を送ると凛は、またぴちゃり、と舌を唾液に絡ませて舐める。

後ろから抱きしめられ、耳穴の淵をなぞるように舌に弄ばれるセイバーは唇を噛んで、その感触に堪えようとする。苦痛や疲労には耐性があるが、くすぐられるような微弱だが抵抗しがたい触感には決して強くはない。

「……そうね、珍しく私の中に芽生えた冒険心かな？」

「それは……どういうことですか？凛」

「そんなことよりも……ねぇ、あなたに触られて士郎のあそこ、どうなってきている？」

……その言葉にはっとしたのは、セイバーではなく士郎の方であった。

気ままな暴君である遠坂凛の言葉と視線と行動に手も足も出ない士郎であったが、その言葉で股間に触るセイバーの手を意識する。剣を握る逞しい籠手のような手のはずだったのに、それは絹の手袋のように柔らかい――触れる皮膚がかっと熱くなる。

そして、肌が触れればそこに血液が集まっていく。そしてなにより、今の士郎の股間は血液は流れ込んでも流れ出そうとしない。そうすれば自然の摂理で、士郎の肉棒は次第に姿を変えていく。

それはセイバーも察していたようだった。闇目にもセイバーの顔が赤く、瞳が落ち着かないようにきょろきょろと動く。

「シロウの……シロウのが硬くなってきています、これは」

「あ、よかった。見られたときにしおしおになって、もう勃たなくなったらどうしようって思ってたから」

くすり、と悪戯そうに笑う凛。

なおも凛の舌はちゅぱりちゅぱりとセイバーの耳を舐めている。まるでそうすることでセイバーの力を吸い取り奪っていくかのような――まるで英雄アキレウスの踵のように、セイバーの耳を弱点と知っているかのような、凛の舌戯れ。

34

「遠坂、お前ひどいこと考えてるな」
「む、セイバーに触られて勃たせているのにその言い分は何よ」
「ああう、凛、このままシロウに触っていては……その、宜しくありませんが……」

セイバーが何度も首を動かし、凛の舌から逃れようとする。その中で漏れた囁きはすぐに凛に笑って返される。

「いいのよ……もっと士郎を触って硬くしてあげて……」
「え……そんな……凛」

囁き声にセイバーも、そして士郎も絶句する。
凛は目を閉じ、身体をセイバーの背中に押しつける。そして顔をセイバーの横に宛い、首を擦りつけるようにしてひたすらに抱きしめられた彼女の耳を追う。

「だって……セイバーとこうするために士郎の部屋に夜這いしたんだから……」
「え?……え?·え?·え?·え?」

思いもよらぬ凛の言葉に、士郎はその存在がすべてクェスチョンマークになってしまったかのような当惑を露わにする。だが、セイバーの手に触れたままの股間は収まりがつかないまま、どんどんと血液を貯め込み硬度を増していた。

「な、遠坂?·なに?·」
「だから、セイバーと一緒に士郎と……したいから」
「り、凛?·!」

甘く酔ったような凛の声と、驚きを隠せない士郎とセイバーの声。
だがセイバーは凛に抱かれ、士郎はセイバーの手に股間を押しつけて動けない。凛は軽くセイバーの耳朶を咬む。

「遠坂……すまん、その、何がどうしてこうなったのかよく……」
「だから、士郎もセイバーのことが好きだし、私もセイバーのことが好きだから……セイバー、私のことが嫌い?·」

凛はセイバーの耳に囁きかける。ふるり、とセイバーは首を振る。

「凛は私のマスターです。好悪の感情は……いえ、そういうことを抜きにしてももちろん好きですが」
「……そう。じゃぁよかった……こんなことすると私を嫌いになっちゃう?·」

ぐ、と身体をセイバーに預ける凛。そうすることで、挟まれたセイバーの身体がより一層士郎に密着する。セイバーの手に触れる士郎の股間は熱く硬く、脈打っているのも感じる。

セイバーは凛の意図を察しようとして、振り返る。だがそれを待っていたように凛は唇を合わせていく。

ふ、と唇が触れあう。小さく凛の舌が唇に触れる。それは微弱な電流を流したようにセイバーの身体を震えさせる。士郎は二人のキスシーンを、押し倒される格好のままで焼けそうな網膜に刻み込んでいる。凛の手が緩み、そしてそのままセイバーの手首に宛われるのを見る。
その中で、微かに枯れた熱い息を吐きながら士郎が呻く。

「……遠坂。俺はお前を愛しているし、セイバーのことも好きだけど……これは、こういうのは……」
「そんなことといっても、ここをこんなにしていたら……説得力ないわね」

ぞくり、とその感触に士郎は震撼する。
凛の手はセイバーの上から重なり、その手を操って士郎の股間を撫でさすっている。今まで触っていたのと比較にならない掌の柔らかな感触。いやがるようなぎこちなさが逆に士郎の官能を刺激する。

「こ、これは男の生理的現象でこんなことになったらそれは誰でも……」
「……士郎はセイバーとは……したくない?·」

その一言に、ぶんぶんと強く首を振り——そしてそれがもたらす別の意味合いに気が付き慌てて士郎は弁明する。その間もセイバーは真っ赤になって、掌に触れる士郎の感触に惑わされ、俯いている。

「し、したくないわけ無いけど、そんな凛と一緒だっていうのがそれはその、でもそれは凛をないがしろにするのはやっぱり正しくないから、う」
「……自分の心に正直なのは感謝するわ、士郎。じゃぁ……愛している私が士郎とセイバー

35

と一緒になりたい、って言ったら?」
「……う、卑怯だ、そんなの俺に答えようがないじゃないか」

するりと身をかわして隙をつくような凛の言葉に、頬をふくらませる士郎。したいと言えば世間の公序良俗に背を向ける訳だし、したくないと言えば凛を裏切ることになる。士郎とすればその設題に異議を唱えるしかない。

「セイバーはどうなの?さっきの答えを聞かせて」
「……私は……士郎と凛が望むならば……それに凛、ただ貴女が感情だけに突き動かされてこういうことをする訳ではないと思います。それであれば」

俯きながらのセイバーの答えは訥々と流れていくが、その言葉にはっと士郎の顔が上がる。それに凛も僅かに眉を顰めた。その仕草は何となく後ろ暗い所を指摘されたかのような……
「な?こ、これも何かの計画なのか?凛」
「無い訳じゃないけども、それは自己正当化の大義名分に過ぎない。そんなこと私が口にしてもロマンティックじゃ無くなるだけ――だから、私はセイバーと士郎を抱きたいの」

くっと、強い言葉で、凛は口にする。そして、自分の強い言葉を恥じたようにぼそぼそと……
「だって……士郎と二人でするのがだんだん気持ちよくなってきたから……三人だったらもっと気持ちよくなれるかもしれないし、それに、セイバーにも気持ちよくなって欲しいし、士郎とももっと気持ちいいことしたいし……」

――そんなことを言われると……

真っ赤になって切れ切れに言葉で、そんな甘く切なげなことを囁く凛。
反則だ。士郎は心の奥底でくすぶっていた熾火に息を吹きかけられた様に燃え上がる。そんな遠坂に言われたら我慢できるわけないじゃないか。この小悪魔は身も心も俺の虜にしているのに、こんなに熱くさせられることを言われれば――

飲む唾はなく、乾いた喉がただむなしく動いた。
そんな中、挟まれているセイバーも細く囁く。
「……シロウ……シロウのこんなに熱いのを触れていると、私もどうにかなってしまいます。だから私がはしたなく乱れて流されてしまう前に……お願いです、シロウが決めてください――マスター」
「……」

シロウ、と囁く声は耳に入る甘い毒のようだった。すでにぐらつき掛かっている心に楔を打ち込まれるようなものだった。凛によって股間を触らされているセイバーの言葉は千々に乱れていて――あの戦いの場にあった凛々しく逞しい少女と、今の理性と感情の狭間で危うさに震える彼女と本当に同じなのか、自信が持てなくなるような。
「士郎……ね?セイバーと一緒にいいこと……しよ?」

かつん、とひび割れた士郎の理性に最後の一撃が加わる。
ここまで追い詰められて、もう――我慢できるはずがどこにもない。士郎はがらがらと理性が崩れ去る。そして、その本心にある一つの原理が止めどもなく強く士郎を押し流していく。
「凛とセイバーが幸せになれる……んだよね?」
「シロウ……」
「だから、抱きたい。セイバーも、凛も。いや、そんなのは言い訳で本当に二人とも一緒に抱けるのなら、俺は八つ裂きになっても構わないほど、怖くなるほど幸せで……」

士郎はそこまで言うと、感に堪えない様に声を詰まらせる。
セイバーは俯いて士郎の胸に頭を預ける。凛はその答えに嬉しそうに笑う。
「士郎……好き」

§　§

「……わぁ、士郎ったらこんなにしてたのね」
「……そりゃもう、二人に見られてると思うと……」

士郎の腰に、セイバーと凛の顔が並んでいた。凛が指を触れた士郎の肉棒が、硬く起立している。それは先端の亀頭をめくれ上がらせ、明かりの少ない部屋の中でも浮かび上がって見える。
間近で見る士郎の男性自身に、セイバーは不思議そうに目をそそぐ。今でもどうしてここで士郎の身体にうずくまり、凛とともにそれを見つめているのかが分からないように。

凛が指で支えると、その先端がふるんと揺れる。なんとはなしに自分の身体で遊ばれている様な気分になり、士郎が気恥ずかしげに唸る。

「その、遠坂もセイバーも……ど、どうするんだよ」

「それはその……えーっと、さっきはお預けになっちゃったんだけど……うう……」

良い雰囲気なのに、立て板に水を流すように事が運ばない。凛は指で士郎を摘みながら、どうしたものかと悩んでいたように――セイバー相手に積極的だったのに、この躊躇い様。

セイバーはそっと凛に囁く。

「凛……先程しようとしていたのは、口戯ですか？」

「え？そ、その……そ、そうよね、士郎にお口でしてあげようかな、と思ったんだけど」

そうよね、フェラチオよね、とかぼそぼそと口の中で呟きながら指でつんつん、と突くの止めない。ただ、そうやって凛に触られているだけでも士郎にはだんだん堪らなくなってくる訳であり――それに、遠坂の口でそういうことをして貰うと思うと。

士郎は脊髄が熱い信号で溢れるのが分かる。腰の上にある二人によってどんな快楽がもたらされるのか、それは想像するのも怖い――そして、それを上回る快感を与えないと行けない訳であり。

だが、煮え切らない様子を察したのか……

「凛……仕方がわからないのですか？」

「！？」

セイバーはそっと呟くと、驚きの色を隠せない凛の手の上に指を重ねる。そしてあたふたと弁明のように喋り始める凛の前に……

「し、知らないわけはないわよ。お、お口で士郎のを舐めればいいんでしょう？それにセイバーだってその、お、女の子なんだしそう言うことは」

「お、男だから男にどうすればいいって知ってるわけじゃないぞ遠坂……」

「ご心配なく――私が教えて差し上げます。楽にしてください、シロウ」

くすりとくつろいで笑うとセイバーの顔がシロウの肉棒に近づく。

そしてその唇が、期待の先走りに濡れる粘膜の先端に触れて――

「う……ぁ……」「わ……」

「殿方のこちらは敏感なので、手荒く扱ってはいけません、凛。ですので……」

セイバーは軽く羽毛が触れるようなキスを士郎にする。触るか触らないかの繊細な唇であり、髪を結ったセイバーが股間に顔を近づける、そんな光景にくらりとするような――それに、そんな積極的にも見える傍らのセイバーに、口元に手を当てておそるおそる見つめる凛。

確かに何度も凛と身体を重ねてきたが、どちらかというとオーソドックス過ぎるセックスであってこんなことをされるのは初めてで――想像しかしなかった感触に、士郎はぐっと顎を引く。

セイバーは舌を伸ばして舐め始める。それは優しいタッチで、表面を静かにだが確実に刺激して……

「う……はぁ、あ……」

「あ……セイバー、舐めてる……どう？士郎？」

「そんなこと言われても……そ、その、遠坂もしてくれなきゃ……」

セイバーに舐められてるだけじゃ、と言いかけた士郎は自分がどんな破廉恥なことを口走ったのかを悟る。そんな、二人の女性に一度に舐められるだなんて淫猥なポルノグラフのようなことを求めてしまう自分を恥じた、が――

そうよね、うん、と自らを決心させるように頷く凛。そしてセイバーの傍らに並ぶ。髪を軽く掻き上げ、側面から士郎の男根に唇を寄せる。

「そうです、凛。そのまま優しく舐めてください」

「うん……ちゅむ……で、でもどうしてセイバーが知ってるの？」

「いろいろ事情があるのですが……殿方の身体のことは存じ上げていますので」

亀頭を凛の唇に委ね、セイバーは舌を裏筋沿いに下げていく。凛のたどたどしい唇が、ちゅむりと上から先端を包み込む。それはしっとりとまとわりつく様で、身体のどこかに似ていてそれでいて全く別の触感を有していた。

セイバーの思ったよりも手慣れた愛撫と、凛の精一杯の口舌の働き。二つの舌と唇の戯れは、股間が踊り出してしまいそうで――士郎は身体を支えていた腕がくずれ、布団の上に倒れる。それでも二人の愛撫は病むことがない。

37

「こう……んぷ……すればいいの？」
「そうです、殿方の一番感じるのはそこですので……その間に、こちらをこのようにすると益々……ほら、シロウが喜んでいますよ」
「あ……ほんとだ。士郎、びくびくしてるのが分かる」

そんな絹の様に柔らかく肌に融けるような声だけを聞かされると、それだけで達してしまいそうになる。だが、それよりも圧倒的な快感が次々に押し寄せて士郎を翻弄する。

棹を横から揉み込むように噛むセイバー
尿道口に舌を尖らせる凛
玉袋を口に含み、それを転がしていくセイバー
カリの窪みに這わせる凛

それはめくるめく快感で、様々なリズムを持って士郎を快感に誘う。息が上がり、ちょっとでも気を緩めるとそのまま股間が漏洩してどろりと熱い白濁液を吹き出してしまいそうな――凛とセイバーはそんな管を補修するのではなく、まるで飴で出来た管を舐め解かそうとしているように。

士郎は肘で体を起こし、自分の身体を見ようとする。一体なにがどうなっているのか、それを確認しないとおかしくなってしまうそうな――
だが、夜明かりが薄く差し込む寝室の中、士郎の目が見たのは――

「あ――あ」

ジリジリと視神経が電流で焼き切れる――そんな、強すぎる刺激の視覚情報。
頬を窄めるようにして先端を口に含む凛。軸に指を這わせ、舌を舐め上げるセイバー。長い黒髪と結った金髪と、陶然とした女神のような顔、そしてその中心に禍々しく立つ己の男根――

セイバーの瞳が、凛の瞳が士郎を剥く。それは視線と言うより、目の奥に突き刺さりそうなそんな、期待と快感に震える感情の波濤。
士郎がぐっとシーツを握りしめる。そして腰が内側からめくれ上がるような、そんな強い快感。

「うぁぁっ！」

そんな我慢しきれなかったような呟きが士郎の口から、熱い息と共に漏れる。
どっくりと――男根の根本から精液が駆け上がる、それは尿道の内側を走りそのまま外に噴き出そうとしていた。その先は凛の口の中であったが、そんなことを思い煩う暇もない。
己の口にくわえるその器官の変化を、凛は感じ取る、だが――

「凛、そのまま――」

セイバーの声が掛かる。
凛が目を見開く。口の中に熱く湧き出す士郎の精液。舌の腹にどくどくと溢れ出し、苦さと生臭さとどこかで味わったようなほのかに記憶に触る味が、口腔一杯に広がっていく。攻めて零れないようにと口で受け止めるけども、勢いのいい士郎の精液はどんどんと漏れだしていく。

どく、どく、と。

ぶるぶるっ、と士郎の腰が震えた。それは出す物を全て出し切ろうと気張るような印象を覚えさせる。士郎は凛が口の中で自分の精液を含む――そんな、欲望が現出した光景を飽くことなく見つめていた。

つぅー、と一筋の精液が凛の口から垂れる。
凛は唇で覆うようにして、その液体を口に含んだまま抜こうとする。少なからぬ量の精が零れたが、それでも凛は口を覆いながら顔を上げる。

「無理はしなくて良いのですよ、凛……」
「ん……ん、ん……」

心配そうに凛を見つめるセイバー。出す物を出した士郎でさえ、アレを口いっぱいに含んだらさぞ苦しいだろう、と思う。それに凛は口を押さえて何かを言おうとして――
そんなセイバーの肩を、ぽん、と軽く凛が触れる。何気ない動作の筈だったが、そのままぐっと肩を掛けると凛は――

「な――と、遠坂？！」
「んぅー……！」

39

なんの準備のモーションもなく、凛はセイバーにキスをしていた。
もちろん口の中に士郎の精液を含んだままで――唇をしっかりと合わせるキスは必然的にその中の液体を口移しにすることになる。
セイバーも不意を突かれ、凛の唇を避けることは出来なかった。そしてそのまま唇を伝う、なま暖かい液体を凛に飲まされていた。まだ身体の熱さを十分に残した、士郎の精はセイバーの口をも侵していく。
そして、それを分け合った二人の喉が動いて――
「……ん、んふ。お裾分け」
「あ……」
唇を指で拭いながら、そんなことを口にする凛。セイバーもその流し込まれた液体を飲んでいる――そう士郎は考えると、脳みその内側と外側がひっくりかえり、捲れ返ってしまったような感覚に襲われる。目の前で唇を合わせている少女達が自分の精液を飲んでいるというのは信じられないいや信じてはいけない――
セイバーの喉がこくり、と動いたように士郎には見える。僅かに柔らかく融けたようなセイバーの瞳と、その唇から漏れる声。
「これが……士郎の味ですか」
「ちょっと苦いけど……初めて士郎の飲んじゃった」
身体を起こした士郎は、そんな剥き出しになった脳みそを撫で擦るような声を聞く。凛の手は肩から離れず、また二人でキスをしていた。パジャマで髪を解いた凛と、いつもの洋服姿のセイバー。そんな二人が精液臭い唇でキスをしている――それ以上の何かを考えることが出来ない、淫猥な夢が脳裏を侵している、そうとしか信じることが出来ないような。
――信じてしまうと、もうこの世界の外では生きていけなくなる。
そんな恐怖を感じ、また――永久にこの世界の中に在り続けたいという矛盾した欲望。
「あ……んぅ……セイバー、あぁ……」
士郎は手を伸ばし、セイバーの身体に触れる。絹のブラウスが汗ばんだ指先に滑らかに感じる。そしてそのまま士郎は後ろからセイバーの身体に抱きつく。
凛の身体も魅惑的だった。だが、いつも傍らにいるこの女神のような少女に何時しか手を触れたい、そんな心の底の願いが叶うのであれば抱きしめるのは――
「あ……はぁ……」
士郎と凛の身体に、挟み込まれるセイバー。士郎は後ろから結い上げられた髪から解けた後れ毛の艶めかしい項に唇を寄せる。セイバーの肌は滑らかで、そして冷たく心地が良い――そしてそのまま唇を寄せ、腕を後ろから身体に回す。
凛の唇から解放されたセイバーは、今度は後ろから士郎に抱きつかれて振り向こうとする。だが、間近に迫ったその顔を見ることは出来ず、囁きを漏らすばかりだった。
士郎の手が、セイバーの薄い胸を撫でさする。士郎の指はブラウスの上からセイバーの乳房の在処を確かめるように……
「シロウ……は、ああ……その、私は……」
「大丈夫、って俺が言っても信頼できないかも知れないけど、遠坂もいるから……楽にして、セイバー」
「そうそ、さっきは士郎を可愛がってあげたんだから、今度はセイバーよね」
汝授かりたる物を等しく我に与えよ――そんな言葉を口ずさみながら凛の手がストリングタイに掛かる。すっとタイを抜くと、そのままブラウスのボタンを外していく。
ぷちぷちと外されていく前給のボタン。そしてそこに出来た隙間に、士郎の手が滑り込んでいく――工具や機械、そして剣を触る若い無骨な手が、まるで陶磁器のようなセイバーの肌の上を進んでいく。
「……ふぅ……あ、その……わ、私の胸は凛と比べると……」
「あ、ああ」
セイバーがおずおずと上げた声をこれからの行為に対する不安だと士郎は思っていたが、その口から漏れた言葉は胸に関することであった。確かに士郎の手に触るセイバーの胸は、たわわとか指が食い込むような、とかそういう豊かさを感じさせはしない。
それでも、それは確かに女性の身体であった。男性の骨張った筋の多い身体ではなく、下に筋肉があったとしてもそれはしなやかな下地であり、女性らしい柔らかさを持つ身体――

―セイバーの胸を抱く士郎はそう考える。

ぐっとセイバーの項を吸い、香しい芳香を感じながら士郎は囁く。

「そんなこと、言われて初めて気が付いた。でも、セイバーはセイバーだから」

「そうそ、大きいからって必ず士郎が喜ぶわけじゃないからね……ん」

凛はブラウスの前をはだけると、腕を伸ばしてセイバーの背中のホックを外す。ふ、と胸を押さえるブラジャーが無くなったことでセイバーは息を吐く。

そんなセイバーの胸に宛われる士郎の手。下から優しく宛うように――

「あ……シロウ……」

「士郎の指はうれしそうね、セイバーの胸に触れて……ん……」

凛は喉元に軽くキスをして、唇の後をセイバーの肌に残していく。そして士郎の指が触れていない、もう片方の胸に唇を寄せる。ブラジャーをかるく除けるとちゅ、と先端の突起を啄むように――

「はっ、ああ……ん、胸に……シロウと凛が二人で、そんな……」

「まだまだ序の口よ、セイバー。もっと気持ちよく……させてあげるから」

舌を伸ばし、つんつんとつつきながら囁く凛。背後から士郎に抱きしめられ、前から胸に顔を寄せられるセイバーの細い身体がしなう。二人に抱かれているのは逞しい女戦士というよりも、箱入りの令嬢のような細さと美しさを満たしているその肢体。

士郎も、セイバーの身体を無言でまさぐっている。

腕の中にあるセイバーの身体を感じ、指が胸に触るたびに起こる反応を身体一杯に感じながら。凛よりボリュームの無いセイバーの胸を最初はどうしたものかと戸惑っていたが、次第にコツが掴めてくる。

「はぁ……あ……シロウ……」

甘く切ないセイバーの吐息。彼女がどんな顔をしてそんな声を上げているのか、背中からそれが分からないのがもどかしい。それでも指先に神経を集中させ、薄いが敏感な胸を丹念に揉んでいく。胸にも芯のようなところがあって、それを直接揉むようなことはしない。ただその周囲をもみほぐすように――

「ねぇ、士郎?・そっちからの方が良いわね」

「え?」

まるで楽器を書き撫でるように気を集中させていた士郎は、凛の声に慌てて反応する。セイバーの胸から顔を離さない凛だったが、それでも上目遣いに見つめようとする。

「セイバーのサッシュ、士郎が解いて」

「あ……、これのことか」

士郎の手が探るのは、セイバーの背中に編み上げられた紐であった。サッシュベルトがスカートと繋がっており、これを解かないことにはこれ以上セイバーを脱がすことは出来ない。

片手で蝶結びになった結び目に触れるとその一端を引く。これで締め付けなくても十分すぎるくらいセイバーのウェストは細い、と思う士郎であったが。

編み上げ紐に指を通して緩めていく。それと共に凛はスカートとサッシュベルトに手を掛けた。

「あ……じ、自分で脱ぎます、凛」

「いいのよいいの、これくらい私たちにやらせてくれなくちゃ面白くないわよ――はい」

セイバーの腰を浮かせて凛はスカートを脱がせていく。足腰を覆う厚手のスカートを脱がすと、黒いパンティストッキングに包まれたほっそりとした足が露わになる。綺麗な曲線を描く腰はブラウスの裾に隠れてしまっていたが、それでも士郎には――

胸から手を離すと、すっと士郎の手がセイバーのお尻に触る。後ろから身体を密着させ、セイバーのお尻を触るというのは限りなくエロチックで、まるで痴漢行為を犯しているように背徳的な興奮が士郎を襲う。

「セイバー……綺麗なお尻だね」

「あ……やっ、シロウ……そんなの……う、あん……」

士郎の手にお尻をなで回されるのは、セイバーにとっては胸を触られるのよりも落ち着かない思いにさせられる。身体がさわさわと触るたびに逃げ出してしまいそうな――だが、それは前から身体に抱きつく凛の為に果たすことが出来ない。

凛はセイバーの胸に、お腹に頬摺りをしていた。時折いたずらに唇を純白の肌に触れ、白磁の肌を愛する陶狂のようなそんな愛し方で……前はだけになったセイバーの身体は凛によってくまなく愛撫されていった。

「あん……やっぱりセイバー、かわいくて綺麗……士郎に抱かせるのが惜しくなるくらい」

「そ、そんなことを言われても困り……ああっ……り、ます。凛……」

「駄目だって言っても……もう聞けないぞ」

熱い息をセイバーの耳元に吐きながら、士郎はそんな意思を表す。

凛の口に暴発気味に精を放った士郎であったが、まだまだ体の中に欲望が熱く疼いていた。それは触れる手から伝わってくるセイバーの身体のしなやかさと、仄かに香りの立つ彼女の匂いと、そして凛と共にセイバーを抱いているという背徳感故の快感が、狂おしく駆り立てる。

凛も興奮に頬を染めて、セイバーの身体に絡みつく。

へその辺りまで凛の下は進んでいた。もう少し進むと、間もなくパンティストッキングの黒く覆い隠す部分となる。凛は薄く笑って、その肌を覆い隠す薄い膜をつまむ。

凛の指がぺろりと、果実の薄皮を剥くようにストッキングを脱がしていった。息が合い、士郎がセイバーの身体を浮かせる。まるで姫君を召使い二人が着替えをさせるように。

「はぁ……あ……」

「ん、着たままの方がよかった?セイバー」

つま先まで屈み、脱がしたストッキングを片手に笑ってみせる凛。

だが、そんな凛の笑いよりも士郎の目は白いセイバーの足に奪われていた。黒いストッキングを脱ぐと、まるで初めてその秀麗な足が合ったことに気が付くように弱い光の中で浮かび上がる。

凛の手が、綺麗に小降りの指の揃った足を取る。その素振りは恭しさすらも感じる。そしてそのまま凛は愛しそうにセイバーの足に頬を寄せた。

己の足に頬を寄せる凛を信じられない瞳で見つめるセイバー。足の甲に伝わる感触は、身体の他の部分を触られるのと異なっていた。ぞくぞくと震え上がり、足が攣るようなそんな――

「ふあ……凛、そんなことをしなくても……うっ」

「ふふふ、セイバー……可愛いわよ、そんなに怯えなくてもいいわ……」

凛はあらためてその足を手に取り、口づけする。

遠坂がセイバーの素足にキスをしている――頭の中が沸騰しそうなフェティスティックな光景。そんな刺激的な物を見せられる士郎は我慢できなくなる。それに、今こうしている間もそんなセイバーの身体を抱いている……

士郎の手が、身体の前に回る。柔らかなお腹の上を撫でると、そのまま掌が下がっていく。その先にあるのはセイバーの腰を覆い隠す小さなショーツだけ。

「あん……シロウ、ああっ……」

つ、と士郎の指がセイバーのショーツの上を撫でる。

軽く円を描くように、ショーツの上を這う。布地に覆われたセイバーの丘の上を確かめるように士郎は指を動かしていた。この部分は胸以上にセイバーにとっては敏感なようであった。

肩に口元を寄せ、セイバーの身体を腕の中に収める士郎。そうすることでセイバーの身体の反応を全身で感じようとする。く、と指を繰るとそれがすぐに跳ね返ってくる、それが士郎をどんどんと興奮させて――。

ぐ、と士郎は硬く強張った股間をセイバーの身体に押し当てる。

凛は足に唇を寄せていたが、その顔は脛から膝へ、そして内太股へと上がっていく。凛の頭はセイバーの頭の間に挟まれるようにして進んでいく。自分がセイバーの股間を弄っているのを凛に見られる。見られては行けない悪戯を見つかるような、士郎はそんな喉が詰まりそうな感情を覚える。

「ふぅ……ああ……シロウ、凛……」

背中を士郎に、足を凛に押さえ込まれるような格好のセイバーが何度も身体を捩る。それは二人の愛撫から逃げだそうとしているようにも、またその恥戯に酔いしれている用にも感じることが出来る。

士郎の指が、く、と割れ目の上を押し込む。

「ああっ、ん、は……そんないやらしい触り方は、シロウ……」

「こんなの序の口よ、セイバー。もっとすごいことしてあげるから……そうしないと、その、

初めての時は大変だから」

股間に這う士郎の指を間近で見つめながら、凛が囁くその指は脆く壊れそうなものを愛おしんで扱うように、湿り気を帯びてきたセイバーのショーツを撫でている。

かすかな牝の薫り。それを凛は敏感にかぎ取り、微笑みを浮かべた。

「ね、士郎？ちょっとセイバーを持ち上げてくれない？」

「ん……どんな風に？」

「膝に手を入れて……そうね、子供におしっこさせるような格好」

さらり、と凛はそんなことを言い放つ。ああ、成る程ねと頷き掛けた士郎は、慌ててセイバー越しにその発言主に向かって声を上げる。

「え？そ、そんな格好に？」

「だってそうするともっとセイバーを気持ちよくさせて上げられるから。ね？」

「……それは凛……もしかして、あっ！」

セイバーも遅れて凛の発言に聞こうとしたが、もう遅かった。

士郎の手が太股から回り、セイバーの膝裏を持ち上げる。ちょうどそれは凛がくちにしたような、親が女の子を持ち上げておしっこをさせるような格好。

思いの外軽くセイバーの身体を持ち上げてしまい、一瞬士郎は焦る。それも、足を凛に向かって広げさせる恥ずかしいポーズを彼女に取らせていることも合わせて。

「や……こ、こんなのは恥ずかしいです、止めてくださいシロウ」

「だめ。これからセイバーのためにも良いコトしてあげるんだから、聞いちゃダメよ」

「ご、ご免……」

足を広げさせられた格好で抵抗しようとするセイバーの身体を抱き留めながら、もじもじと士郎は口にする。だが、こんなポーズをセイバーに取らせている自分と言うことにも限りなく興奮を覚える。そして今や無防備に曝されたセイバーの秘所にどんな愛撫を凛が行うのか、その興味も士郎を押し立てる。

凛は大きく広げられた太股の付け根を凝視する。士郎の指に弄られ、内側から湿り気を帯びている白いショーツ。それにゆっくりと指を伸ばす。

ふにり、と指がその内側の割れ目を確認するようになぞった。

「あ――んっ、あっ、凛、お願いです、私を辱めないで――」

「そんなつもりは毛頭無いけど、ちょっとは士郎にも協力して貰わないとね……ほら、こんなことされるとじんわりと濡れてきているわ」

すいすい、と爪を浅く掻くように、指が割れ目沿いに撫でる。

ショーツのクロンチの部分は、楕円状に湿っていた。自分の身体がはしたなくも濡らしはじめている、その指摘にセイバーはぐっと唇を噛んでうつむく。

暴れるような抵抗が途端に止んだことで、逆に士郎は不安を言葉にする。

「おいおい、そんなセイバーをいじめるなって」

「セイバーが可愛いからちょっとね……そういう顔ももう堪らなくなっちゃうくらいそそるから。士郎だってこうしてたら同じ事するクセに」

ふふふ、と悪戯っぽく笑うと、凛は指を動かし出す。今度はなぞるだけではなく、ショーツの上から中を揉むように。くちゅりくちゅりと布と膚と水気が立てる音をまとわりつかせながら、それにセイバーの堪えるような声が混じる。

「ひ……あっ、ああ……んあ、凛……」

「ここ……感じるんでしょ？もっと素直になった方が良いわねセイバー、我慢しながらしても私も士郎も楽しくないわ？」

凛の言葉から士郎の名前が出ると、ひく、とセイバーの身体が震える。

「まぁ……遠坂が言うとおりだけど。大丈夫か？苦しくない？」

「シロウ……その、うぁっ……はぁ、苦しくはありません……でも、もしこのまま素直になって快感に狂わされたら、私は……」

「その時は私たちが責任を持って最後までイかせて上げるから。じゃぁ――」

にっこり笑ってそんなことを言うと、凛は股間から指を離す。

だがそれは行為の終了を意味しない。凛はショーツのウェストをつまむと、そのままお尻を経て抜き上げる――

「う、あっ！」

43

「今度は直にしてあげる。セイバーのあそこがどろどろになるまで、私が舐めてあげるから」

その言葉の甘い毒に、身震いするセイバー。

あられもない言葉を口にする凛に、士郎も息を飲む思いだった。そんな、どろどろになるまで舐めてあげるだなんて――セイバーの足を押さえている手もガクガクと震えだして仕舞いそうな、そんな凛の淫猥さ。

凛はセイバーのショーツをふとももの真ん中当たりにまで上げる。足を掲げて開く格好ではここまでが限界であったが、それでも凛の用事には十分であった。

剥き出しになったセイバーの秘所が、凛の目の前に晒される。凛は顔を下げるとそこを診断するようにまじまじと見つめて――

「凛、そんな……や、そんなに顔を近づけては……はぅあ！」

「近づけないと舐められないじゃないの……見せてね、セイバーのあそこ……」

凛がわきわき、と指を動かした後にお尻と太股の境目辺りを両手で触れる。そして、まるで水蜜桃を剥くように、仄かに赤みの差したセイバーの秘所を割開く。

身体を押さえつけられ、足を開かされた少女の秘所を晒す。もし同じことを凛がされたら泣きたい思いだろう。セイバーが手伸ばして凛の頭を押さえるのも分かる。

でも、それは凛の興奮を止めることには出来なかった――

むりり、と秘所が広げられる。その中からとろりとした蜜と、セイバーの身体の奥にある暖かさが湯気になって立つようにも感じる。凛の視界の中では複雑な線を組み合わせた、女性の秘裂が露わになっていた。

「……綺麗、セイバーのあそこ……」

「そ、そんなことありません、そこは不浄です、だからそんなに広げて――ふぁぁ！」

セイバーの頭がかくん、と上がる。

そんな会話と音だけを聞かされる士郎は、まるで生殺しの状態であった。出来ることならこのままセイバーを押し倒したいが、今手放せば逃げられるような気がしている。そのため、股間をぎんぎんと滾らせながら凛の責めを防寒するしかない。

いや、それでも後ろからセイバーを抱き、仄かな暖かさと薫りとその色っぽい仕草を感じ取るだけで快感を得ている。セイバーの頭がいやいやと振られ、それに従って淫らな水音が響き始める。

くちゅりくちゅりと。

「ひぃ……あん、ああ……ふ、ああ……凛、舐めて……そこは……」

「うふふ、士郎のおちんちんを舐めるのもセイバーのココを舐めるのも同じよ。それで気持ちよくなれるんなら……んぅ……はぁ……んっ」

「や……やぁ、ああ……ひ、はっ、はあああ、あんあん！」

凛は唇とセイバーの秘唇に宛い、その下でかき混ぜる。割れ目の中に下を差し入れ、ぴったりと身を合わせ、濡れた襞の中に這わせる。凛の口に伝わるのはセイバーの身体の温もりと、牝の薫りと溢れる粘液の味だった。

「士郎の味もセイバーの味も……似てるかな」

「なっ、そんな……何を一体遠坂おまえ……」

「んー、でもそんなこと確かめられるのは私だけだしねぇ……ん、ちゅむ……」

凛はそんなことを言いながらセイバーの秘所の中をなめ回す。

指で大陰唇を割開き、果実のような中身を凛は的確に舌でねぶっていく。ここをこうされると弱い、ここがここより感じやすい、こんなことをされると思ってないから余計に感じる、そんな責めを凛は目を閉じ、舌を集中して動かしていく。

それはセイバーの喘ぎ声と、我慢しきれない様な震えになって現れる。くしゃくしゃと無意識に凛の髪をかき混ぜながらセイバーは呻く。

「はぁ……あ、ああん……凛、そんなに……そ、そこは敏感ですから……ああ、そんな風にされると……ひ、ふぁっ、ああん……いい……はぁ……」

「なぁ、セイバー……気持ちいい？」

「それは……はぁ、も、もちろんですがこのように……凛に舐められるというのは……うぁ！」

クリトリスを重点的に責めはじめると一際セイバーの声が高くなる。

士郎は腕の中のセイバーがじっとりと汗ばんでくるのが分かる。抱き始めたときにはあまり体温が高くない感じがしたのだが、今ではブラウスが湿るほどに汗ばんでいる。こうやって押さえていることがお預けに感じてしまって堪らない。

「ちょっとセイバーは濡れにくいのかな？でも」
「ひゃうぁ……あああっ！」

凛の声と共に、指がつぷりとセイバーの膣口の中に埋もれていく。
甘酸っぱく身もだえていたセイバーだったが、この挿入には痛さを感じたらしい。身体がぎゅっと硬く緊張するのが士郎に感じる。故に士郎は唇をセイバーの耳元に宛う。

そしてキスと共に、優しく語りかける。

「力を抜いて、セイバー。こんなにがちがちじゃ痛くなるから」
「でも……そんな……し、シロウがそう言うのでしたら……でも……」
「そうそ、私が力が入らなくなるまでセイバーにしてあげるか、セイバーが士郎を受け入れる為に力を抜くか……どちらでもいいわ、ふふふ」

指をゆっくりと回しながら、凛は囁く。セイバーの入り口に浅く挿した指は、まるで噛むように強く締め付けられていた。だが中から滾々と泉のように湧き出してくる愛液に濡れ、このまま力を入れれば奥まで挿すことも不可能ではないように思える。

セイバーは無言で荒い息をしていたが――こくん、と赤い顔で頷いた。
くにゃり、とセイバーの身体から力が抜け、その体重が士郎には軽く感じる。足に突っ張るような抵抗があったが、今はまるでお人形のようにセイバーはその身体を脱力して士郎と凛に委ねる。

うわ、と士郎は声を上げそうになる。セイバーの身体の柔らかさと、思いの外の軽さをあらためて知らされるようで――抱きしめる手が震えるのを押さえることが出来ない。
セイバーは荒い息を鎮めるように、ゆっくりと深く呼吸している。

「うん、良い判断ね。さすがはセイバー」
「う……そんな風に言わないでください……はぁあ……凛、こうすれば……」

凛はセイバーに唇と指を進めていく。先程までは噛むように抵抗していたセイバーの入り口も、徐々に力を弱めていった。凛の指が第一関節から第二関節へと徐々に沈んでいった。
その間も凛は、舌でクリトリスをつつき続けていた。包皮の上から柔らかく、くすぐるようなタッチで――そしてセイバーの秘所はしとどに濡れていく。

「あ……はぁ、う……シロウ……ひぃ、はぁ……凛……ん、ん……」
「ど……どんな感じ？凛」
「だんだん慣れてきてるけど……わ、私が士郎と最初にしたときはもっとキツくて大変だったんだからもう」

セイバーのことを話している筈なのに、途端に凛は思い出して怒り始める。たしかにあのときは大変だったな、と士郎はおかしく思い出すが――
「じゃぁ、あのときもセイバーにして貰えば良かったとか？」
「も、もう、馬鹿な事言わないでよ士郎。そんなことを言ってる士郎も準備は良いの？」
「はぁ……ん……あ……ああ……」

セイバーの切ない声を挟んで、士郎と凛がどこかおかしそうに話し合う。凛の問いにぐ、とセイバーの身体を持ち上げて見せる士郎。
座り上体を起こしてセイバーを抱えている格好なので、必然的に被さるセイバーを持ち上げると、そこには今や硬く強張った士郎の股間があった。

凛はセイバーの秘裂から顔を上げると、陰にある硬く起きあがった陽物を見る。そしてそれに恥ずかしさを覚えたのか口ごもりながら――
「い、一回出したのにもうそんな風にして、士郎ったら……」
「だ、だってアレは暴発みたいなものだったんだから……それにセイバーが、その、すごくえっちな感じがして……正直もう堪らない」

士郎はそう言うと、ぶるりと腰を振るわせる。ずっとお預けを食らわされる格好の士郎は、今か今かとセイバーの身体を貫ける瞬間を待ちかまえていた。肉棒はすっかり起きあがり、このまま持ち上げたセイバーの身体を下げてて行けばそのまま奥まで差し込めそうなほどに。
凛もしばしセイバーを愛撫するのを留め、まじまじと士郎の股間を眺めていた。セイバーははぁ、はぁと肺の底から息を漏らしている――

セイバーの中にまだある指がくりゅっと回転して引き抜かれる。それはセイバーの粘液に濡れ、ぬたりと糸を引いていた。胎内にある違和感がなくなり、セイバーのぐったりと力の抜けた身体は士郎の腕に支えられるままになる。

45

「これだけ濡れれば――大丈夫ね。いい、セイバー?」

凛は尋ねるが、セイバーは声にならない。ただ、こくこくと小さく頷く。

その仕草を士郎も当然理解する。いよいよか――と、それは高鳴る胸を押さえることは出来ない。今腕にあるこのしなやかな身体の、強いけども嘘みたいに華奢なセイバーを抱いて女にすることが出来る。それも凛が見ている前で――それが倫理的にどうだとか、そんなことを考えることが出来ない。

「……本当に大丈夫か?セイバー」

「多少痛くても構いません。その……シロウ、あなたが望むままにしてください、それが私の望みでもあるのですから」

セイバーの細い、小さく、そして胸の奥まで染みこむ呟き。

士郎はそんなセイバーの言葉に深く頷いた。出来ることならセイバーを痛がらせずにしたいが、どうなることか――硬く滾っているその欲望の固まりはセイバーの身体を傷つけずには居られない気がする。

士郎は凛を見る。ほんとうにしていいのか、と無言で問う瞳。

それに気が付いた凛は、肯定の頷きを返す。

「士郎……セイバーにしてあげて。大丈夫、私がちゃんと手伝ってあげるから」

「あ……うん、その……セイバーのこと、頼む」

「……馬鹿。少しは自分のことも心配しなさいよ。失敗したら大変なんだから」

失敗?と士郎は不思議に思う。

今まで成功だの失敗だのそんなことを凛の口から聞いたことはない。だがそれを今更言い立てる気は士郎には毛頭無い。

ぐ、と腰を動かしてセイバーを真下から貫く位置にする。セイバーはくったりと士郎の腕に抱かれるままに静かになっている。凛の指がセイバーの襞をくつろげ、士郎の物を導く態勢にする。

つ、と士郎の亀頭の先端がセイバーの襞に触れる。

硬い士郎の亀頭と、柔らかいセイバーの秘唇。粘膜同士が触れると、二人の身体が快感の予感に微かに震える。セイバーのその部分はしたたっており、十分に自分の物を受け入れられる――そう士郎は考えた。

ならば――セイバーという女体を今まさに味わうべきである、と

「……いくよ、セイバー」

「はい……あ……ああっうう!」

ぐ、とセイバーの身体が落ちる。

それはセイバーの体重でもって、セイバーの陰門を串刺しにするようなであった。セイバーの身体はその秘部で以て、士郎の先端を受け止める。襞の寄った膣口はグロテスクでもある亀頭に押し割られ、愛液をまみれさせながら進んでいく――

セイバーの口から悲鳴が上がる、だがそれはすぐに唇を噛んで押し殺される。

硬く締まった陰門が、士郎の亀頭を締め付ける。凛の指をも拒みそうになるほどに締まっているのであるから、当然それよりも太い肉棒を締め付ける。

「あ……ぐ……はぁぁぁ……ひ!」

そのままであれば、セイバーと士郎との成功はうまくいかなかったかも知れない。

だが凛はその接合部に唇を触れ、舌でセイバーをくすぐる。顔をぴったりとセイバーにくっつけ、襞から上のクリトリスを舐め上げると……

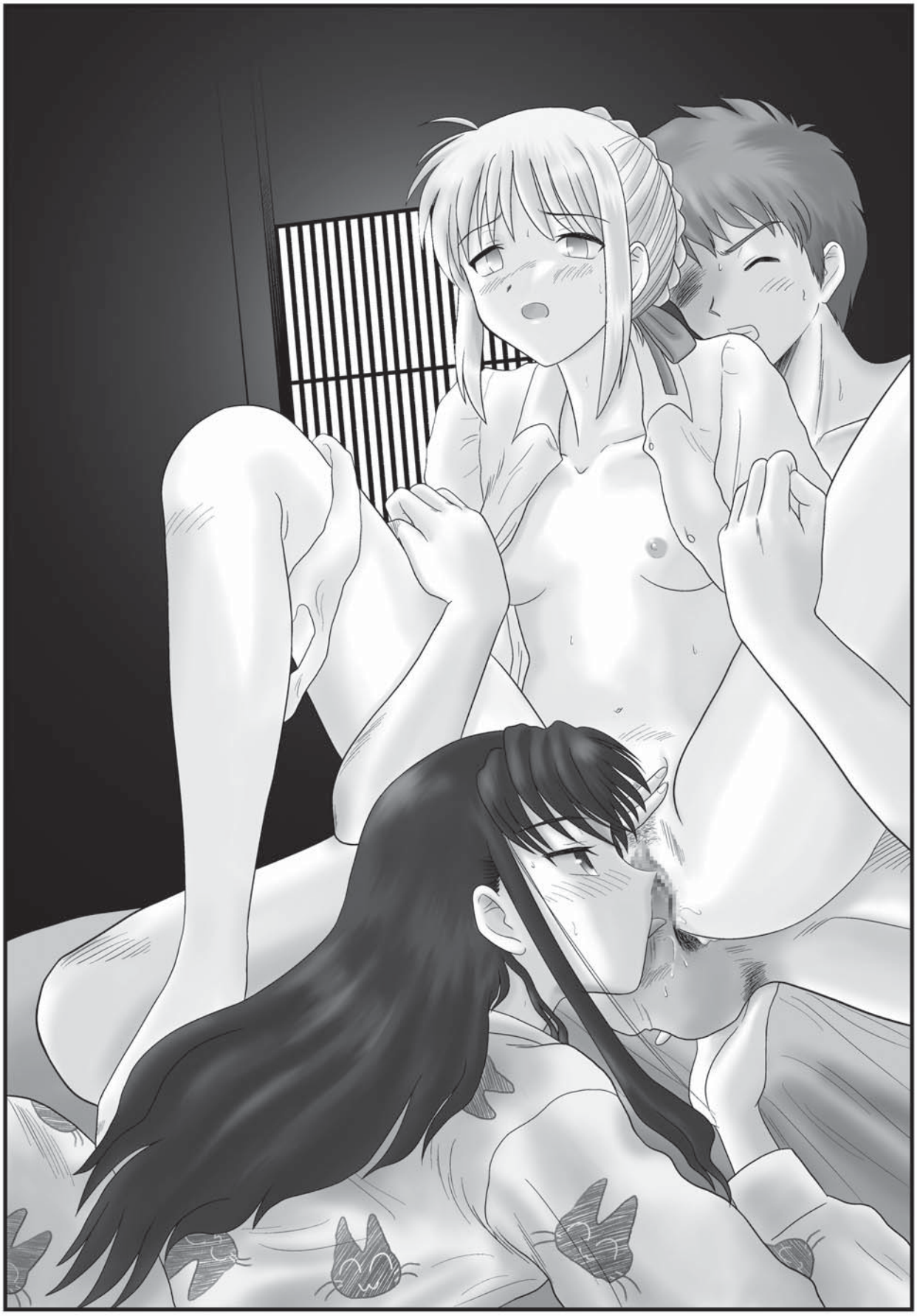
「は……ああ、凛、そんなところを舐めては……ふぁああっ」

「お……ああ……セイバーの中に……ん……」

セイバーの力が緩んできたのか、ずず、と少しずつセイバーの身体が沈んでいく。士郎は己の肉棒に絡みつく、セイバーの肉壁の熱さときつさを感じていた。確かにそれは奥まで差し込むと壊れてしまう、いや、自分の男性自身が逆に折れてしまいそうなほどのきつさであったが、それでも引くわけにはいかなかった。

それに、凛の舌がぴちゃぴちゃと舐めている。時折士郎の肉棒に当たると、それはぞくぞくっと震えるような――セックスの最中に第三者に愛撫される、それは何とも言い難い快感であり――凛が音高くセイバーの秘所を啜るためたびに、より深くセイバーの中を進めるように感じていた。

やがて、士郎の突き進む男根が止まる。ぎりぎりまで押し広げられたセイバーの身体が、これ以上すると裂けそうな、そんな抵抗。セイバーはお腹で深く息をし、その中に喘ぎ声を



混じらせる。それは快感と苦痛がない交ぜになった、聞く者を奇妙な興奮に駆り立てずには居られない甘い声――

「はぁっ……あ、ああ……シロウ……どう、し、たのですか……」
「ん……こ、これ以上進めると……いや、進めないと行けないんだけども」
「きつそうね、セイバー……でも頑張って。私だって士郎と最初にするときは壊れちゃいそうだったから……」
「はぁ……ああ、そんな心配は……苦痛には慣れて……でも……」

セイバーは荒い声に呻く。
こんなセイバーの声を間近に聞くのであれば、いっそ止めた方が士郎は安堵する思いであった。だが、ここまでしておいて中断というのはあり得なかった。そう、ここを通過すればセイバーの奥底まで貫け、己の思うところを為すところが出来る。

「じゃぁ、いくから――セイバー」

そんな欲望のエゴは、今このときだけは士郎の勇をふるわせる。セイバーの足を話すとお腹に手を回す。士郎の足を跨ぎ、後背座位の格好になると士郎は下からセイバーの身体を突き上げる。

ずずずっ、と士郎はその肉の抵抗を押し通した。腕に抱えるセイバーの体が熱い。首が仰け反り、士郎の頭とぶつかりそうになる。金の髪は解れ、顎が宙を挿すほどに――
そんな苦しげなセイバーの身体の奥底は、熱くきつく士郎に絡みついていた。未開の処女地を士郎の先端が開拓していく。それは狭く、襞の寄った熱く締め付ける肉の筒であった。ぷちりと破瓜の音をどこかの身体で士郎は聞いた――気がした。

「あああ……はぁ、うぁ……シロウのがこんなに奥に……う、上にぶつかりそうです……」
「すご……い……セイバーの中に……動くよ、いいね……」
「根本までセイバーの中に刺さってる、シロウの……ちょっと血が出てるけど」
「心配は要りません……シロウ、お願いです、私を……苦しいままでは納得できません、もっと……教えてください、私の身体に……」

そこまで口にするとセイバーの身体がくたり、と前に倒れそうになる。
その身体をお腹の辺りで支えていた士郎は慌てて支えようとするが、それより先にセイバーの身体を凛が抱き起こす。身体を起こした凛はセイバーの両手に指を絡め、向かい合ってその身体を支える。

セイバーと凛の頬が触れた。

「り、凛……はぅ、あ……あん……」
「セイバー、安心して。私が見守ってあげるから。士郎?」
「うん、遠坂がそうしてくれるなら、助かる。じゃ、する……」

ぐん、と士郎の腰が動き始める。
セイバーの膣道が士郎をきっちりと包んでいて、このまま奥に進むことも抜くことも出来ないような気がしていた。だが、腰を動かし始めるとセイバーの中をきつくではあるが、行き来することが出来る。それはセイバーの奥底から湧き出す愛液と、士郎の漏らす先走りの液故か。士郎はごつ、ごつと腰を下から突き始める。

「はぁ……ああ、うう……ひ、うう……シロウ……」
「セイバー?身体を楽にして、士郎と私に託して……もっと感覚を集中して……そう、そんな感じ……ん……」
「は、い……だんだん熱く……でも、わ、私の奥に士郎のが……んっ、はぁ……」

セイバーと凛は時折唇を合わせながら、そんな言葉を囁き合う。
セイバーと凛がお互いにぎゅっと指を絡めて手を繋ぎ、首を擦り合わせるようにしている光景は士郎には、計らずしもセイバーだけではなく凛をもともに抱いているような錯覚を抱かせる。それはセイバーを突き上げる振幅が、抱き合う凛の身体も一緒に揺らしている為か。

「セイバー……セイバーの中、すごくきつくて……癖になりそうで……」
「シ、シロウそんなことを言っては凛に……ああっ、はぁ……んぅああっ……」
「良い感じね、士郎、もっと速くして――セイバーをもっと気持ちよくさせて上げなくちゃ」

そんな凛の声が、ぞくりと耳から脳に突き刺さる。
その声に促されるままに、士郎のペースが上がっていく。ずんずんと下からセイバーの身体を突き上げると、軽い身体が腰の上でぽんぽんと弾んでいく様な気がする。士郎の感覚はセイバーに接する腕と腰だけに集中していた。

悲鳴のように上がる、肉棒伝いの快感。それは止めどもなく身体に染みこみ、腰の奥に熱

48

く宿る欲望の泉に注がれていく。まるで頭の中が空っぽになり、腰の中に自分の脳みそが入ってしまったかのような――身体がおかしくなるような、息苦しく圧倒的な感覚。
それはセイバーの身体を感じていると言うことに起因している。凛の柔らかな体を抱くのとまたひと味違う、感触と快感。それが士郎をただ腰の動きだけに意識の全てを集めていく。

ぐん、と士郎のペースが加速する。セイバーの弾む身体のテンポが速くなる。
ぐしゅりぐちゅりと絶え間なく、繋がりあう二人の身体が湿った肉を擦り合わせる音を立てる――

「ひい、ああ、し、シロウ……ふ、あああっ、いい……あっあっあっ……」
「高まってるわ、セイバーの体の中……どんどんと熱くなって……そう、その感覚に、リズムに合わせて……良い感じ……セイバー……」

凛がセイバーとキスをする。二人とも目をつぶり、手と手と唇と唇を触れ合わせて。
凛の唇が言葉を紡ぐ。だが、それは何かの意味を成す言葉として士郎の耳には入らなかった。いや、今の士郎は耳元で鐘を鳴らされても気が付くものではない。

ただ、速く
ただ、強く
ただ、快感を求め
ただ、快感を与えるためだけに――

目の裏から脊髄に掛けて真っ白になるような。

「ふぅ……ああっ、シロウ……もう……も、もう私は……」
「セイバー――ああっふ……うぉあああああ――」

うめき声を漏らしながら、士郎はセイバーの奥深くに放っていた。
抱いたセイバーの身体がびくびくっと痙攣する。腰の上に深く跨るセイバーの身体の奥底に熱い精を放つ。士郎はその快感に酔いしれる。

凛と唇を合わせるセイバーは、息を止めて快感に震えていた。唇越しに伝わる息は身体の中で燃えて熱く、凛の唇に焼けそうに伝わる。唇から喘ぎ声と共に漏れた唾液を舐め取りながら、凛はセイバーの顔を見つめた。

仄かに酔ったようなセイバーの瞳。それは苦痛が払われ、今や放心したような悦びに染められて――凛の手がほつれかかるセイバーの金髪を掻き上げ、額に軽くキスをする。
「ふふ……可愛かったわよ、セイバー。こんな顔士郎に見せたら妬けちゃうくらい」
「あ……ああ……中に、¥シロウのが……熱い……はぁ……」

くらり、とセイバーの背筋から力が抜ける。
それを抱き留めると、凛はそっとセイバーの身体を横たえようとする。士郎の腰からセイバーの足が解けぬぽり、と二人の体液に濡れた部分が離れる。
士郎は腕を放し、そのまま放心したように腕を着く。セイバーの締め付ける身体の感触がまだ残っている。

「はぁ……ああ……ああー……」

だが、そんな余韻に深々と酔うことは出来なかった。すぐに凛の手に横たえられたセイバーの元に寄り添う。前のはだけたブラウスと膝まで下げられた黒いストッキング、そんな姿のセイバーを見つめる
「セイバー……大丈夫?」

士郎が手を伸ばすが、どこに手を触れて良いのか分からない様に空中で迷う。もしかして彼女を苦しめてしまったのかも知れないと言う思いが、手を触れることを拒まれると――だが、薄目を開いたセイバーがその手を握る。
自らの手を士郎に重なったことを知ると、再びセイバーは目を閉じ、まだ上がった呼吸のままで言う。

「ええ、大分落ち着いてきました……シロウが中に来たときにはすこし……」
「あ、あ、うん……初めてだったからその……ん?」

セイバーを見下ろしていた士郎。だが、両手がふわりと頬に触れる。
顔を上げると、向かいには凛が何とも面白い物を見つけたような視線で士郎を見つめていた。間近に凛の顔を感じると、士郎はあ――と今更のように思い当たる。

「……うぁ、そ、その、遠坂」

49

自分は凛の前でセイバーを抱いたわけであり、それを隠すべくもなく恋人である凛に見られていた、それも気持ちよさげに射精までしてしまったと。だけどもこれは凛が公認であったので罪はない、どころか共犯は遠坂凛その人でありこんな目で見られるのは心外だ、いやでもデリカシーのない俺の快感本意の行動は罪であってこんなのは――士郎はどもりながらどんな言葉にもならぬうめき声を上げる。

だが、凛はそっと目元を和らげるとこつん、と額をくっつけてくる。

唇が何か、短い言葉を口にした――聞き取れない低い、不思議な発音

「ん……ご苦労様。うまくいったみたい」

「そ、それはまぁ俺は出しちゃったけどセイバーは初めてだしイったかどうか……」

「そう言う事じゃなくて……いや、セイバーが気持ちよかったかどうかも重要だけど、それも本当は重要かというと副次的な課題で……」

「は？」

話がずれ、おまけに滑舌が悪い凛を士郎は驚きの瞳で見つめる。

凛は間近に士郎の瞳がありながらそれから顔を逸らそうとして――出来なかった。士郎はおそるおそる尋ねる。記憶の中にある、凛の不規則発言の数々。

セイバーを抱いているときにはそれどころではなかった、細かな発言の違和感、それがようやく士郎の中で形を取る。

「そうだ、する前もしてる間もなんか変な事言ってたな、遠坂。まさか……」

「もう、こんな時にそんな風情のない事言わせないでよ……私は士郎とセイバーの間にパスが出来るかどうかを確かめたかったの。幸い波長があったようだから、細いパスは通ってるわ」

な、と士郎は鼻白む。そんな大事なことを何で今まで黙っていた、と叫びそうになるが――

その唇を、凛の唇が優しく、そして卑怯に塞いだ。

柔らかな唇を前に、士郎はその言葉を封じられる。凛は微笑みながら口を離す。

「だから、セイバーを維持するためには士郎の力を借りてるけども、私が何かあったときの保険のために――それに私経由で力を伝えるのはどうも効率が良くないの。それなのに士郎とセイバーは波長が近しいから……」

「そ、そう言うことは先に言って……」

――そんなことよりセイバーとも、士郎ともしたかったから。セイバーに気持ちいいことをお裾分け出来る大義名分ってコト、無くてもしたかったし……ね、士郎？」

凛はにっこりと笑うと、再び唇を合わせてきて――

「さっきは士郎とセイバーに見せつけられちゃったから、私にもして欲しいな……」

「ば、ばか、そんなあからさまに……」

「もう、こんな可愛い女の子が身体の疼きを持て余してお願いしているんだから、応えてくれるのが男の子ってものよねー」

「凛、すいません、私がシロウを独占してしまって」

「いいのよ、じゃ、次はセイバーも手伝ってね？」

え？と疲労に眠そうだったセイバーの目がぱっちり開いた。

唇が離れた後、士郎は困りきった顔で俯く。

その短い髪をばりばりと掻くと、きっと顔を上げて――

「ええい、そんなこと言われたら我慢できるわけ無いじゃないか！今夜は寝かさないからな、遠坂！」

「今度は私がシロウと凛を……わ、わかりました、努力してみます」

「うふふふ、ね、二人とも私の物だから、私をたっぷり愉しませてね……あん」

〈おしまい〉

編集後記

阿羅本　景

どうも、阿羅本です。今回の同人誌はお楽しみいただけましたでしょうか？

今まで睨月舎／Ｍｏｏｎｇａｚｅｒは月姫でやっておりましたが、今回からようやくFateで同人誌を出すことに相成りました。1月末に発売されて5月に新刊、というのは随分のんびりしている話なのですが、その間のイベントまでに色々出す算段が着かなかったので、かむろの里様に寄稿させて貰ったりはしたのですが、今回初めてＦａｔｅで発刊することになりました。

たしかにＦａｔｅ発売前は不安だったんですよね、余りにも月姫が凄かったのでＦａｔｅで同人のＳＳ書けるかなぁ、というのは不安を感じていたもので……体験版をプレイしたときはああ、いけるんじゃないのか？とぼんやりは感じていたのですが、実際やってみないとと思っていたものです。

で、それは杞憂というか、実にあっさりと「ああ、面白いじゃないか、これならＯＫ」と意欲をかき立てられたのですね(笑)。それからと言うものＦａｔｅに頭を切り換えてＦａｔｅ三昧という有様になっておりました。

やはり誰がＦａｔｅの中で好みなのか？というと「Ｆａｔｅの構成要素の大部分」とも言われる遠坂凛ですね。いやぁ、彼女は凛様、と及び無くてはならないほどに魅惑的なヒロインであり、彼女がいなくてセイバーだけだったらかなり息苦しい話になっていた事でしょう。

セイバーもやはり好みではあります、こう、礼儀正しい女の子を嫌いになることは難しいと言うところでありましょうか……桜も好きですよ？みんな何か桜はダメだと仰る方は多いようですが、実際桜は陰陽定めがたい不思議な魅力があるとその内気がつきますので、ある意味通向きだと(笑)

男性キャラはやはり味わい深いですし、イリヤとかもなぁ……イリヤも色々欲しかったんだけどなぁ、やっぱりなぁ、ロリは重要なのにロリは(爆)。あと、美綴をもっと上手く使って欲しかったです、いやほんとに、ここが残念かなぁ。

しかし、それ以上に熱いストーリーであり、バトルであり、エンターティメントとして一流の作品であったと思います。こういうのがプレイできて幸せですな。

で、作品解題というか、書き手の呟きを。

『三人共に』はオーソドックスな凛グッドエンド後の３Ｐものです、ええ、これをやらないとこのカップルはやっぱりダメだと思います、神の御心はすなわち凛とセイバーで３Ｐであると(笑)。ある意味ベタなお話であり、いろいろひねる前の前段階という感じも私はしないでもないですね、はい。

こう、もうちょっと弾ければ良かったかな……と思う次第でもあります。

で、そうやって弾けたのが『さーばんとらいふ』

メイド服で凛様、もうこれしかない、ただその一念を岩をも通す愚直さで貫いたのがこの作品であります。その辺はどうよ？といわれるともう『ああ、書いてて楽しかった！』と満面の笑みと共に歯を輝かせるほどに、全てを出し切りました、もうなにか訳の分からない液体を滴らせながらメイド服凛様を書き続けました……ああ、ステキ。

今回は、表紙のデザインを皇Ｄｅｓｉｇｎｓの皇征介さまにお願い致しました。昔からＨＰやファン投票応援のＣＧなどで拝見させて頂き、綺麗だなぁと思っていたので今回のお話に協力をいただき、まことに感謝でございます。

また挿絵もＰＩＮ・Ｘさんと火星田レイ子さんにお願い致しました。美麗なＣＧを寄せて頂きいつも有難うございます。これからも色々よろしくお願いします。

さて、今回は初のＦａｔｅ同人誌となりましたが、これからも皆様の応援をいただけるとまことに有り難く存じます。それではどうか、よろしくお願い致します。

でわでわ

FateSeeker vol.1

2004年５月30日　第一版発行

制　　作	『睨月舎』
発 行 人	阿羅本　景
編　　集	保谷渡辺工房
発 行 所	睨月舎／Moongazer
	〒202-0005 東京都西東京市住吉町4-4-21　渡辺方
	Mail:QYK02345@nifty.ne.jp
	HomePage:http://moongazer.f-o-r.net
印刷製本	プリンティングイン株式会社(PICO)

（不許複製・転載を禁ずる）